

何れ死ぬであろう私が鬼滅の世界を生き抜いた話。

蔓桔梗

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

原作で既に死んだ人物になった者が鬼滅の刃の世界を生き抜くお話。

原作開始前に死んでいる人もいるので口調わかんない…ふいーりんぐ

あとメタ発言も多い。

??初っ端から最新話ネタバレ含んでいます??

ネタバレダメ、ゼツタイな人は最新話を読んでから

小噺（番外編）、はじめました。

目次

小噺

憐れな男に姉の形見は流石に貸せなかった噺	1
恋の呼吸は誰にでも息づく噺(生存 i f)	6
其れは泡沫の夢の噺(i f)	10
必要とされる臆病者の噺	16
家族であるからこそその噺	24
愛しているが故の噺	30

本編

何れ死ぬことを自覚した私の話	35
何れ死ぬ私が運命に抗おうとするが癒される話	39
何れ死ぬ私が運命に抗おうとする話	43
何れ死ぬ私が運命に抗っている話	48
何れ死ぬ私が運命に抗えなかった話	53
何れ死ぬ私が挫折する話	59
何れ死ぬ私が藤の花に埋もれる話	63
何れ死ぬ私が『悪鬼滅殺』を刻む話	69
何れ死ぬ私が同士に出会った話：壱	74
何れ死ぬ私が何時かの柱を育てる話	77
何れ死ぬ私が同士に出会った話：弐	82
何れ死ぬ私が世界の中心と出会った話	86
何れ死ぬ私が傍聴する話	90
何れ死ぬ私が想いを託す話	95
何れ死ぬ私が期待しない話	99
何れ死ぬ私が真意を告げない話	104

何れ死ぬ私が死地に招かれた話

小噺

憐れな男に姉の形見は流石に貸せなかつた噺

那田蜘蛛山編は胡蝶しのぶが数少ない活躍する場面の中の一つ。
まあ、最大の^無見^限せ^城場^編と比べると影の活躍の部分が多いから活躍して
るかって言われると首を捻るかもしれない。

だが、よくよく考えて見て欲しい。

この山でやることは大まかに分けて三つだ。

一つは負傷者―主に人面蜘蛛の毒の治療。

もう一つは姉蜘蛛の討伐。

そんでもって最後は主人公ズとご対面からの富岡さんと鬼ごっこ。
そこまで戦闘はしてないけど富岡さんよりやること多い。多分、主
人公の次にやること多かったレベル。

あの場面からして姉蜘蛛と彼は距離が近かつたのでそこまで苦労
はしてないだろうが問題はその前だ。

しのぶさんは西の方からやって来た。

その道中で毒の処置をして…いっぱいある繭の調査をして…

つまりだ。移動距離、めっちゃ長い。

最後に涼しい顔で鬼ごっこするしのぶさんすっこいですー。

やることいっぱいだし、シビアな時間を求められる場面もある。

と、いうことで那田蜘蛛山RTAはつじまるよー！

隠の先導は妹に任せて先行して生存者いないだろうけど繭の調査。
少しやったら合流したので一部の人に任せてさらに奥へ。

次に人面蜘蛛の解毒。異臭の中に長時間いるとかムリ。可及的速
やかに処理して次々♪つと。

さてさて、今の進捗状況は分からないけどイイ感じのタイムでは??
次なる場所へ向けて駆けながら内心で自画自賛しているとヒュル
ンと良い布の動く音が微かに聞こえたので方向転換。

視界の先、木々の間に隠れながらも人間サイズの白い塊を発見。

自画自賛していたけど村田さんが捕まってしまったので予定調和だな。

「あたしの糸束はねえ柔らかいけど硬いのよ?」

ツンツンとなんとかもがく繭を見て不敵に笑う姉蜘蛛。

悦に浸っているところ申し訳ないけど先がつかえているんだよね。

「蜘蛛の次は蚕、ね」

急ブレーキで減速。慣性を殺せばあら不思議。

あなたの後ろから這い寄る混沌。

：ただ単に、やってきた方向が姉蜘蛛とは正反対の方向だっただけ
なんだけどね。

今晚は。と話しかけると突如、現れたように見える私を呆然と見つめる。

その空白の時間、命取りだよ? まあ、鬼に素直に伝えようだなんて微塵も思わないけど。

「今日は月が綺麗ですね…取り敢えず、死ね」

「……っ!!」

居合抜きで頸を狙ったけど、本能が警鐘を鳴らしたのか運が良かったのか。ゴロゴロと地面を転がって回避されてしまった。

「外しちゃったか…ザンネン」

危険だと判断したのか逃げ腰になっているけど、逃す気は全くないね。

「蟲の呼吸 蝶の舞……戯れ」

加速して擦れ違いざまに刺突を六連撃お見舞い。

気付いた時にはもう刺されて血が吹き出た後。

全く反応できなかった速度に驚いて頸に手をやる姉蜘蛛だけど突かれただけで切られてはいない。

「小柄で腕力ないから頸を切れないって思った? そんな足手纏い、増援で来るワケないでしょ」

私の刀を見て頸が切れないと確信したよう姉蜘蛛は攻撃しようと手を伸ばす。

だけどそれはもう手遅れ。

「人間は鬼と違ってか弱い存在なんだから手段なんて選んでられないのよ」

身体に異変が起こった姉蜘蛛は理解できない顔で腕き苦しむ。その様子を横目に刀についた僅かな血を振り払って納刀する。

柔らかくて硬い糸束。それは内側からの話で外側はそうでもない。繭の調査をした時に裂くコツは掴んでいたのであっさり破って中身を引きずり出す。

「大丈夫そうね」

「ええ…鬼は」

「殺しました。毒を使ったからあとは腐るか日光で消滅するだけ」

悪・即・斬の勢いで姉蜘蛛を片付けたので当然のように村田さんは無事、繭から生還。

「道中、繭の中の惨状を見たけど溶けてなくて良かったわね。服は犠牲になったようだけど」

大丈夫だと分かっているけど一応、負傷していないか確認。うん、服だけ綺麗に溶けてる。

私の一言でやっと素っ裸だと気付いた村田さんは恥ずかしそうな声をあげてしやがみこんだ。

さて、もう累くんは討伐済みだろうからお次は兄弟弟子の感動の再会のお邪魔虫をしに行かなくては。

「……………はうう」

「……………」

近くに隠がいたとは言え、性被害者みたいな村田さんをこのまま放置するのも可哀想だな。

何か羽織るものでもないものか…

辺りを見ても草木と鬼の死体だけ。

流星に死体から剥ぎ取った着物は嫌だろうしなあ…しかも死因、毒殺。さらにイヤ。

…仕方ない。私のを貸すか。

「……………」

脱ぎかけた蝶模様の羽織を見る。

次に羽織の貸出先を見る。

「……………」

この羽織は姉の形見。

それをヒロイン的ポジションの村田さんに…？しかも素っ裸の。

「ごめん、ムリ。」

いや、村田さんは良い人だと知っているよ？

めちやくちや良い人だと知ってるけど、大切な大切な姉さんの形見を素っ裸の男に渡すのは流石に…流石に、ね??

他、他は…詰め襟…?

でも、詰め襟は…大切な場所が隠せないしな…上半身だけ隠せても意味ないし、そういう意味では大体隠すことができる羽織が理想的。

だけど、羽織は…でもそれしか…行動を移しかけた手前、今更やめるわけにも…でも、羽織は…!

「くっ……………」

姉さんだったら…姉さんだったら躊躇い無く羽織を肩にかけるわ

…

だったら羽織を渡してあげるべき。姉さんだって許してくれる。

そして医療従事者としても、人としてもそれが正解の行動…

「あの…無理をしなくても良いですよ…」

私の葛藤に村田さんは人来るまで草むらに隠れているんで大丈夫ですよと遠慮してくれるがここまで来てしまえばこれはもう私の良心的問題だ。

「ごめんなさい…羽織は、姉の形見なの…本当にごめんなさい…」

「形見は流石にそうですよねー」

「でも、現場を見てしまった手前…貴方に何もしないで見捨てるわけにも行かないわ」

「へ?…」

いや、流石に形見はねえ?と同意してくれる村田さんには本当に感謝しかない。

「中途半端でも申し訳ないけどこれを貸すわ」

真夜中の山にブラウスに羽織は肌寒いけど背に腹は変えられない。それ以上の人が目の前にいるし。せめて少しでもマシなように詰め襟を渡した。やはり、無いよりも有った方が良かったようで村田さんはありがとうございますと感謝を告げて手を伸ばした。

さて、思いの外時間を取ってしまったがそろそろ彼らのところに行かなくては。

「あ。武器仕込んでいるから着る時は気をつけて」
「はい。」

まさか那田蜘蛛山RTA一番の難所がここだなんて…

恋の呼吸は誰にでも息づく噺（生存if）

「待ってください。確かに彼は隊律違反を犯しました。ですが、話を聞くくらいはしてあげてもよろしいのではないのでしょうか？」



あの日、私は姉を完全に救うことはできなかった。だけど、姉を死なすこともなかった。肺の半分を潰された姉は柱を降した。それもそうだ。肺は呼吸をするにあたって大事な器官だ。それが欠けたとなれば鬼を倒すことも難しくなる。姉と肩を並べて戦うことが出来ないのは残念だが、『姉さんが生きている』その事実があるだけで十分だ。

主人公と同じく鬼に同情を抱き、『鬼とは仲良くできる』と持論を掲げる姉は当然のことながら主人公たちを庇う。

竈門炭治郎の鬼に対する想いを知っており、姉の考えもよく解っている私は待ってましたと言わんばかりに姉側につく。

「姉さんの言う通りです。弁明の一つくらい聞いてあげればいいのに」

あく相変わらず姉さんは綺麗で可愛い。

毅然と対応するその姿勢、険しい顔、カツコイイ…好き。

まさか弁明の一つも聞けない器量の狭い人が柱であるわけ、ありませんよね？と煽りながら裏ではそんなとりとめのないことを考える。煽らないと姉に窘められたが反省は一切ない。

愛する家族である姉の味方でないはずがないのだ。当然だろう？

それに禰豆子ちゃんは別だとしっかり理解しているのでわざわざ殺そうだなんて一ミリも思えないのだ。



えええ… こんな可愛い子を殺してしまうなんて…
胸が痛むわ。苦しいわ。

甘露寺蜜璃は隊律違反をしたらしい少年に大変同情的であった。
そしてその同情をはつきりと口にした女性をみる。

元花柱の胡蝶カナエさん…。

しのぶちゃんのお姉さん、だったわよね。しのぶちゃんと一緒に綺麗でカッコイイなあ…

それにしても、しのぶちゃんってお姉ちゃん子だったのね。普段のしのぶちゃんもカッコイイけどこのしのぶちゃんも可愛くて好きだわ…

普段、柱合会議などで会った時には見せない側面に意外な思いがあるが、そっちの方がなんだかしのぶちゃんらしいと思つた蜜璃は微笑ましい気持ちだ。

伊黒さん、相変わらずネチネチして蛇みたい…しつこくて素敵

富岡さん、離れた所に一人ぼっち…可愛い

いつものようにキュンときめいているとしのぶちゃんと目があつた気がした。

「……………」



姉さんの姿を見ているととても安心する。

完全ではないけど自分が運命に抗えたという証明であると共に大切な愛する家族だからだろうか。

姉さんのキリツとした姿を見ればカッコイイと思う。

柱としていた時には強い憧れを抱いたものだ。

姉さんの笑顔を見ると可愛い、綺麗だと思う。

家族の団欒に姉さんの姿を見ると心がホワホワとする。胸がドキ

ドキとする。

ふと、誰彼構わず胸をときめかしてハートを飛ばす蜜璃ちゃんが視界に入る。

蜜璃ちゃんは恋の呼吸というとても独創的な呼吸の使い手だ。

そのためとははつきりとは言えないが、蜜璃ちゃんはキュンとなりやすい。敵にはときめかないようだけど。

「……………甘露寺さん、今姉さんを見てどう思いましたか？」

「え…カッコよくて綺麗だなあって…」

「です よね」

もしかしてと思つて蜜璃ちゃんに近寄つて姉さんのことについて尋ねてみる。

思つていた通りの言葉に全私が同意した。

「やっぱりそうですよね。蜜璃ちゃんもそう思いますよね。姉さんは凄いです」

そうだろう、そうだろう。姉さんは凄いだぞ。

フンと胸を張つて自慢したくなるが、今は自重しよう。

一応、柱合裁判中だからな。

裁判のさの字もないし、判決はもう決定済みだけど。

シリアスやるみんなには悪いが結果が分かりきっている私にとつてはさほど重要ではないのだ。

そんなことよりも一つ分かったことがある。

この胸の高鳴りはやはりときめきだったのだ。

最初、恋の呼吸などと言われた時は正直に言おう。はあ??と思つた。

全くもって意味が分からんと思つたし、ときめきのツボも謎すぎた。

でも、今なら少し分かった気がする。

「恋の呼吸って誰にでも息づくものなんですね…」

「えっ!?! そうなの??」

恋の呼吸って尊いなんだなあとしみじみと眩くと蜜璃ちゃんは大層驚いた顔をする。

え、違うの??

其れは泡沫の夢の噺（i f）

「せっかくだもの。みんなでお花見しましょうか」

姉の一言によって花見は姉妹だけではなく、蝶屋敷に住む者全員でやることになった。

今日、この日に限って診療所は休業だ。

蝶屋敷の人は殆ど出払うので余程のことがない限り対応ができない。

隠には事前に言っているし、もしもの時に備えて場所は伝えているのでまあ何とかなるだろう。

隠の人は大喜びで御任せくださいと張り切っていた。

何故、嫌がる様子を見せずに喜んでいるのかは分からないが空回らないのなら別にいいか。

半日だけと言えども人が完全に出払うので薬や諸々の補充は完璧にしないとイケない。それに加え、行くのは結構な人数になるのでお昼の準備だつて大掛かりになる。

行く数日前から準備に大忙しだ。

他人に見せられないものもきちんと隠さなければ。

普段から嚴重に管理しているが念には念を入れないとイケない。もし見つかったら姉に追求されるのは確定事項だ。

姉はみんなが好きなものなら何でも、私は佃煮、妹はアオイが作ったものなら何でも。

妹の好きなものを見れば分かるだろうが普段はアオイが食事を作っている。

なほたちもいるがまだ小さいのでアオイが仕切っているのだ。

だが、今回は息抜きも含めているのでみんなで作ることになった。みんなの好きなものをバランスよく詰め込む。

重箱に詰まったみんなの好きなもの。

豪華なその様子に歓声上がる。

久し振りに作る料理はみんなと一緒に作っていることもあるが意外と楽しい。

なんて事のないことを話しながら笑って拗ねて、摘み食いしちやダメよと釘を刺して。

重箱の中身が完成したら次はおめかしだ。

「髪、結構伸びたわね」

「そうかしら？」

「いつも纏め上げているから分かりずらかったのかも」

下ろした私の髪に櫛を通しながら言った姉の言葉に確かに同意する。

前までの私は肩にかかるくらいだったのに何時の間にか胸にかかるくらいになっていた。

数字にすると多分、10〜20センチとかそこらだろう。

「ねえ、しのぶ、カナヲ」

「何？姉さん」

「今日だけみんな髪型変えてみない？」

悪戯っ子のように笑いながら言う姉の言葉を聞いてまだ髪を下ろしている妹を見る。

「ええ、いいわね」

前々から思っていたのだ。人の髪を好きなようにいじってみたいと。

妹だって、姉だって綺麗だ。それに似合うように好きなようにやってみたいと。

それに何より、自分の髪はやりづらい。

途中で様子を見に来たアオイも巻き込んでお互いの髪をいじりあつた。

髪が私より長い姉。くせっ毛が入っている私と違ってサラサラな髪。

そこまでヘアアレンジについて詳しくないので簡単なものしか出来ないがそれでも姉に似合いそうな髪型を想像するだけで楽しい。

ここにタブレットがないのが悔やまれる。あつたら姉さんに一番似合いそうな髪型を探せたのに…

ただお団子にするのも味気ない、かといって複雑なものになると私

の技量が足りない。

しょうがないので編み込みしてシニヨンにしよう。

飾りはどうしようか。やはり私たちの代名詞である蝶は外せないな。

「〜♪」

「ふふっ楽しそうね、しのぶ」

飾りを軽く当ててあーでもないこーでもないとしていたら知らず知らずのうちに鼻歌がもれていたようだ。

「ええ、姉さんのこと思ったように着飾れるんだものとっても楽しいわ」

鬼殺隊士と言えども女の子だ。

オシヤレは楽しい。他人を着飾るのはもつと楽しい。想像した通りに似合っていると嬉しい。綺麗だと、素敵だと言われるのはもつと嬉しい。

牡丹の髪飾りをつけて蝶の簪をさす。

1歩離れて姉の全体の姿を見る。

うん、薄紅色の着物に似合っている。

「じゃあ次はしのぶね」

出来上がりに満足していると今度は姉の番らしい。

櫛を片手に笑う姉にしようがないかと鏡台の前に座る。

「しのぶはいつも髪を上げているから今日くらいは下ろしてみましようか」

丁寧にとかさされた髪は上だけ掬われてまとめあげられた。

ハーフアップだ。

そこに藤と蝶の簪がさされた。

「これは…」

私たちの手持ちにこんな簪はなかったはずだ。

なら、姉の持ち物かと言えば違う。だって姉の雰囲気になし合わない。

「最近頑張っていたしのぶに贈り物」

姉は着物を新調するだけでは飽き足らず、簪も新しく買ったらし

い。

みんなには内緒よ？と笑う姉にため息をつく。

「しょうがないわね…」

着物だけで十分よと言いたいところだが、姉が私のために簪を見繕ってくれたということが嬉しいのは事実。

「アオイとカナヲは終わった？」

照れ隠しのように話を逸らす。

アオイとカナヲは自分にやっているようにしたようだ。

2人が珍しい髪型にしているのはそれだけで新鮮だがせつかくの花見なのだ。

妹には紫陽花の飾りをアオイには桔梗の飾りをつける。

「みんなとつても可愛いわ」

「似合ってるわよ2人とも」

「お、お2人も綺麗です!!」

私たちの褒め言葉に顔を赤くしたアオイの頭を思わず撫でる。

「準備もできたし、行きましようか」

重箱と敷物を、私たちはもしもの時のために剣を剣袋に入れて蝶屋敷を出す。

目的地である桜はそこまで遠くない。

料理を作った時のようになんてことのない世間話。

鬼も呼吸も、鬼殺隊の話も血なまぐさいものが一つもない平和な会話。

「わあ…！満開ね」

「綺麗ですね…」

「…きれい」

成人しているのは姉だけ。姉も周りが未成年ばかりなので酒を持ち出そうという考えはなかった。

未成年ばかりの花見はピクニックのようだ。

と言ってもこの世界に来る前の私の家族は花見はすれどレジャーシートは広げなかったのでニュースで見た光景から想像したらただだ。

桜を見ながら話をしながらご飯を食べる。

食後の小休息に生えていた白詰草を摘んで花冠を作って妹の頭に乗せる。

「しのぶさん、作り方教えてください！」

「いいわよ。まずはこうやって…」

それを見たなほ達が花冠の作り方を聞いてきたので妹を巻き込んで作る。

「しのぶ、楽しい？」

「ええ、とても…」

なほ達が落ちている桜の花弁を拾って飛ばして桜シャワーの中で楽しそうに踊ってる姿に目を細める。

「とても、幸せだわ」

肩を寄せて頭に手を乗せてそっと撫でられる。

「そう、それは良かったわ」

「愛してるわ、しのぶ」

頬に手を添えられて額を合わせて姉はそう告げた。

「ええ私も。大好きよ姉さん」

目頭が熱くなつて涙が一筋流れる。

「頑張つてしのぶ。貴女なら出来るわ」

「ーっ」

その一言で息が止まった。

花の香りが漂ってギュツと抱き締められる。

「待つて…！お願い…」

暖かい温度が、身体に伸し掛る重みが蝶となって消えていく。

「待つて!!」

手を伸ばし起き上がると見慣れた景色が目に入る。

鏡台が目に入る。

映るのは後ろ髪がバツサリと切られた私。

置いてある藤と蝶の簪は姉の遺品整理の時に包み紙に包まれていたのを見つけたのだ。

「ああ、そっか…夢か」

必要とされる臆病者の噺

私の名前は神崎アオイ。

一応、鬼殺隊士だ。

最終選別を運良く生き残り、隊士になれたは良いが私はそれだけで恐れた。

――人を喰い殺す鬼を

――無惨に死んでいく人たちを見て殺されることを

私は、死ぬことを恐れ、戦いを放棄した腰抜けだ。臆病者だ。

そんな私が逃げ込んだのは蝶屋敷だった。

蝶屋敷は鬼に家族を殺され、身寄りが無い女の子たちの居場所だった。

そして、花柱の妹である胡蝶しのぶさんが医学に精通していたので負傷した鬼殺隊士の診療所となった。

蝶屋敷に住まう女の子たちは負傷した彼らの世話やりハビりに付き合うことで鬼殺隊に貢献していった。

戦うことを放棄した臆病者にとってそこは逃げるのに絶好な理由だった。

屋敷の主である花柱であるカナエさんはそんな私を追い払うことなく、受け入れた。

カナエさんが亡くなり、しのぶさんが屋敷を管理することになって。彼女が蟲柱になった後も。

私を追い出すこともなく、任務を入れられることもなく、私は負傷者の看護をしている。

◆◆

珍しい人が屋敷にやってきた。

その人はカナヲと同期で鬼になった妹を連れてくる。

妹を人間に戻すために鬼殺隊に入ったらしい。

竈門炭治郎。

彼は真つ直ぐで素直な人だ。

同じく同期の二人は機能回復訓練を途中で辞めたが彼だけは最後

まで続けた。

その姿に触発されたのか（しのぶさんの煽てもある）彼らも訓練に復帰し、蝶屋敷にやってくる前よりも強くなったらしい。

継子であるカナヲと良い勝負をするようになった。

怪我の具合も良くなつたし、そろそろ彼らは此処からいなくなるだろう。

負傷者の傷が癒え、完治することは良いことだ。

だけれども、何故だろう。

強い彼らが戦いに赴くことが羨ましくて、妬ましい。

「お礼は結構です。私は戦いから逃げた腰抜け、臆病者ですから」

新たな任務が来たらしく炭治郎さんは出発する旨とお礼を言ってきた。

礼を言う人は少なくはない。

私は戦うことから逃げ、安全圏でのうのうと生きている。

そして、その代わりと言わんばかりに彼らを治し、戦いに行かせているといつても過言ではない。

そんな私にお礼なんて言わないでほしい。

鬼と戦わなくても良いことに安堵していながら、戦う気なんてないくせに戦いに向かう強い彼らに嫉妬するそんな私に。

礼を言われる度に、彼らが屋敷を立つ後ろ姿を見る度に胸の底に澱が降り積もる。

「俺を手助けしてくれたアオイさんはもう俺の一部だからアオイさんの思いは俺が戦いの場に持つていくし」

そんなこと、言われたのは初めてだ。

鬼に大切な人を殺される人が少なくなれば良いと思った。その助けになればと私は鬼殺隊に入隊した。

だけど、その想いを果たすには私は弱かった。あまりにも弱すぎた。

なんてことのないように言った炭治郎さんの言葉に今まで溜まっていた澱が無くなった気がした。

彼の言葉に救われたのだと理解するのは難しくなかった。



炎柱が何千人という人を一人も亡くさずに救い、上弦の鬼によって命を落とした。

その話と一緒に彼らがまた蝶屋敷に運ばれてきたからきつと彼らはその時、共にいたのだろう。

来た当初は意気消沈としていた彼らだったがすぐに復活して、また元気に任務に励んでいる。

強いなど改めて思う。

目の前で柱を喪つてなお立ち上がるうとは私だつたら思えない。

それなのに彼らはそれを乗り越えてさらに強くなるうとしている。

「……ああ、羨ましいな……」

羨んでいる暇はない。私しか出来ないことだつてあるのだからしつかりしないと浮かんた考えを振り払っていると表が騒がしい。

「すみ、きよ、なほ。お客さん？」

患者ならば私にすぐ知らせるようにしているのでそうではないのだろう。

来訪予定の人はいなかったはずだと今日の予定を思い出しながら玄関に向かうと影がさす。

巨漢だ。見上げる首が痛いほど背が高い。

あまりの高さに呆けていたが確かこの人、音柱だ。

彼の奥さんが時々、しのぶさんを訪ねてきていたから見覚えがある。

「おつ丁度良い」

音柱は私の姿を見るとヒョイと担ぎあげる。

突然の出来事に固まっていると騒ぎを聞きつけたのかカナヲの姿がひっくり返って見えた。

「…継子は胡蝶の奴が面倒だからな」

カナヲも連れて行こうと手を伸ばしたが継子だと気づいたのか途中でやめた。

全くもって意味が分からないがそのまま流れに乗るわけにはいかないことは分かる。

「放してください!!私っ…」

柱と連れて行かれるという二つで戦いに連れて行かれると思うと途端に怖くなる。

支離滅裂な言葉しか出てこない。

「かつ…カナヲ!!」

イヤだ。とても怖い。行きたくない。連れて行かないで。

恐怖から目から涙が溢れる。

どうにか絞り出したのはカナヲの名前。

でも、彼女に助けを呼ぶのは間違っていると叫んでから気づいた。

カナヲは自分で物事を決められない。

全てがどうでも良いから、らしい。

そんな彼女は指示がなければ銅貨を投げて物事を決める。

ずんずんと遠のく蝶屋敷にそれでは間に合わないと理解するがそれでも今、私を助けてくれそうなのは彼女しかいない。

戦いに連れて行かれると分かれば嫌だと泣き叫ぶだなんて見つてもない。

だけど、今まで戦いに逃げていたから当然の報いだと思ってしまう自分がいた。

なのに私は涙を流しながらカナヲの名前を叫ぶことしか出来ない。

がしつとカナヲが私を掴む。

銅貨を投げていないのに行動したことに驚く。

カナヲはそれで精一杯なよう音柱の言葉に何も言えない。

ふと、何時かの記憶が蘇る。

「……とても強いあなたが羨ましい。私は臆病者だから

「……いいえ、アオイちゃんの方がずっとずっと強いです。だから、アオイちゃんは臆病者ではないですよ

記憶の中の彼女は困ったようにたれ気味の眉をさらに下げた。

継子の証である萌黄色の蝶の髪飾りを撫でながら羨ましそうにそう言った。

彼女はしのぶさんの継子たちの中で異色を放っていた。

誰もが彼女のことを嗤い、面倒事は御免だと関わらないように蜘蛛を散らすように逃げる。

何故、継子にしようとしたのか分からないほど隊内での評判は良くなかった。

だけれども、継子の中で群を抜いて強かった彼女。

何が私の方が強いだ。

嫌なことから逃げて、いざ逃げれないとなると泣きながらみつともなく助けを呼ぶことしかできない。

そんな私の何処が強い。腰抜けだと嗤われるくらい弱いじゃないか。

「女の子に何してるんだ!!手を放せ!!」

炭治郎さんだ。

任務が終わったから寄りに来たんだろう。

彼は私が攫われそうになっていることを理解すると頭突きを喰らわせようとするが相手は音柱だ。女一人を抱えても当然のようにかわす。

「アオイさんを放せ、この人攫いめ!!」

「うるせえ!!俺は任務で女の隊員がいるからコイツ連れて行くんだよ!!」

まさか屋根に登るとは思わなかった。急に変わった景色に頭がクラクラする。

「継子じゃねえ奴は胡蝶の許可を取る必要もない!!」

「今日は、宇髄さん。蝶屋敷ウチの者コに何か御用ですか?」

ぽんつと右肩を軽く叩いたしのぶさんは珍しく笑顔だった。

優しい声音。緩く弧を描く唇。細められた目。

それだけを見れば笑っていると思うだろう。だけれども、瞳だけは笑っていないかった。

さっきの言葉から、音柱はしのぶさんには何も言っていないのだろう。そして見つければ面倒なことになることも自覚していた。

壊れかけの絡繰のようにギツギツと後ろを振り向くその姿が答え

だ。

「ところで、誰の許可が必要ないんでしょうか？」

笑みを更に深めて疑問を口にしていているだけなのに背筋が凍る。

絶対に怒っている。聞いただけなのにそう何だから問われた側は更にすごい圧がかかっているだろう。

「……任務で女の隊員が必要になった。連れて行っても良いか？」

「それは困りますね。後継者である彼女を喪うわけにはいけませんもの」

今、しのぶさんは何と言った？

後継者？ 継子はカナヲではないのか。

「後継者だあ？ コイツがか」

役に立たなそうなのにかととても痛い視線をもらうが私だって初耳だ。

「ええ、彼女は私の後継者です。なので彼女を連れて行くことは許可出来ません」

キツパリと告げるしのぶさんに分が悪いと感じたのか素直に返された。

「だが、女の隊員が必要なのは変わりねえ。アテはあるのか」

「そうですねえ……女ではないのですが、行く気満々な人たちはいるようですよ？」

ほら、あそこにと示された先には炭治郎さんだけではなくいつもの三人がいた。

「えっ」

「……ま、いつか。じゃあ一緒に来い」

一人だけまさかそうなるとは思っていなかったようで声をあげるがあっさり引き下がった音柱に黙殺された。

「お気をつけて〜」

笑顔で見送るしのぶさんだが、「もう二度と来んな」という副音声がついているような気がするの気のせいだろうか。

「あの、しのぶさん……私が後継者ってどういうことですか？」

「あら、言っただけだったかしら。そのままの意味だけ」

しのぶさんは解っていると思ったんだけど私の疑問に是と答える。

「カナヲが継子ですよね？」

「そうよ、カナヲは次の柱候補。そしてアオイは蝶屋敷の次の管理責任者」

私の再度の確認に言葉が足りないことに気づいたのかしのぶさんは言葉を付け足す。

「全部、カナヲじゃないんですか」

『継子』は柱の直弟子で次の柱候補だ。引退した柱の後を継ぐことが多い。

だから私は花柱から蟲柱に受け継がれたようにカナヲが柱になったら継ぐものだと思っていたのだ。

その言葉にしのぶさんはため息をついてちらりとカナヲを見る。

「指示待ち人間に医療の最前線を任せる気はないわ。一瞬の判断で命は零れ落ちるのか決まるのだから当然よ」

カナヲには厳しいことを言うけれど…と前置きされた言葉の続きに驚きを隠せない。

だってそのことについてしのぶさんは何も言わなかったから。現場にだって連れて行っていたのにまさかそんなことを考えているなんて思っていないかった。

「でも、私は戦いから逃げた腰抜けで…臆病者ですよ」

「そんなの関係ない。そもそもそんな気がなかったらあなたに蝶屋敷を任せていないわよ」

弱々しい反論は返す刃で切り捨てられた。

確かに今思えば、留守の間など蝶屋敷をよく任された。

てつきり、年長だからだと思っていたがどうやら違うらしい。

そのことに疑問を思っていなかったからしのぶさんは解っていると誤解していたらしい。

それにさっきの言葉は言い訳にもならない。

カナヲが継子になる前の蟲柱彼の継子女はほとんどの隊員から嫌われるほどの問題児だった。

問題児だと知っている上でしのぶさんは彼女を継子にしているのだ。問題児を継子にするのも臆病者を後継者にするのもしのぶさんの中では一緒なものだ。

「あなたは自分のことを腰抜けとか臆病者だと言うけれど、本当の腰抜けなら当の昔にいなくなっているわ。逃げずにここで多くの人の救い、傷を治してきた。それは紛れもない事実で、誇るべきことよ」
私は臆病者だ。怖いから、死にたくないから、戦いから逃げた。
なのに未練がましく蝶屋敷で看護をしている。

「胸を張りなさい。誇りなさい。」

この私^{蟲柱}があなたが必要だと言っているのだから誰が何と言おうと私の後継者よ」

真っ直ぐに私を射抜くその眼差しに私は、ずっと蝶^此屋敷^処にいても良いんだと今まで抱えてきた憑物が落ちたような気持ちになった。

家族であるからこそその嘸

悲鳴嶋さんとは時折、近況を報告し合う仲だ。と言つてもそこまで仲は良くない。と思う。

悲鳴嶋さんは善い人だ。

私たち姉妹を鬼から助けてくれた。死んだ両親のことを悲しんでくれた。

私たちのように大切な人が鬼に奪われる人をこれ以上増やしたくないと鬼殺隊に入ることを決意した時、彼はその道の険しさを説いてくれた。

それでも、私たちの決意がブレないと理解したら何をすべきなのか教えてくれた。

応援してくれていたんだと思う。

私たちが鬼殺隊に入隊できたことを知ると涙を流して喜んでくれていた。姉が柱に就任した時も。

悲鳴嶋さんは引くくらい涙脆いけど、とても優しいお人好しだ。

誰かを鬼から救ったことなんて多くあるだろうに私たちがどんな風に過ごしているか聞いたり、鬼殺隊に入りたいと言った時には可能な限りの便宜を図ってくれていたようだった。

だけど私はそんな悲鳴嶋さんを姉を死なせないための手段として利用した。

恩人に対してするべきでない事くらい解っていた。

恩を仇で返すようなことをしていると自覚している。

それだけ私は必死だった。

それなりに長い付き合いをしていたのだからきつと、悲鳴嶋さんだつて分かっている。自分のことを利用したのだと。

姉が亡くなつたきり、付き合いが悪くなつたのに彼は今までと変わらずに近況を報告し、尋ねてくる。

本当にお人好しすぎる。

悲鳴嶋さんには返しきれない恩がある上に利用したことに対する

負い目もある。

だからこそ、悲鳴嶼さんの滅多にない頼みを聞かない訳がなかった。

◆◆

「……新しく取った弟子の体を診てほしい

それが悲鳴嶼さんの頼みだった。

検診するくらいならお安い御用だ。

だが、そもそも悲鳴嶼さんに弟子はいただろうか??

最新話まで追いかけていたわけではないので単に私が知らないだけかもしれない。

重要なのは継子ではなく、弟子であると言うことだ。

継子と言っていないことはそういうことだろう。

私も蝶屋敷の次の管理者継子ではない後継者に心当たりはあるので分かる。

柱の候補ではないが違うものの後継者か、単に直々に教えているだけなのか。

どちらなのかは知らないが、どうでもいいか。

『悲鳴嶼さんの弟子』に心当たりはないし、どうせ私の知らない人だろう。

「こんにちは、悲鳴嶼さんの紹介で来ました。不死川玄弥です」

なーんて思っていた時期もありました。(一)

大正この時代では先進的な髪型モヒカン。

右頬から鼻にかけて走る傷跡。

どこからどう見ても主人公の同期である不死川玄弥くんですね。

え、マジで悲鳴嶼さんの弟子??

初登場時、すぐ死にそうなモブ（失礼）だったのに??鬼殺隊最強な悲鳴嶼さんの弟子??

あーでも、鍛冶の里で念仏唱えていたし、納得かも?

記憶を探ると煉獄さんの訃報時に悲鳴嶼さんと一緒にいたような……いないような……

そりゃ、悲鳴嶼さんが体を診てほしいと言うわけだ。

だって彼、鬼喰ってんだもん。

どういう原理で無事なのかは全くもって知らんが下手こけば鬼になるかもしれないリスクな行為を知ってそのまま放置する訳がない。

やってきたのが彼である時点ですら察していたが、悲鳴嶼さんからの手紙には弟子向かわせたから診てほしいとしか書いてないので何も知らないという体で事情聴取しなければならない。

私が鬼絶対殺すマン（偽）だったから良かったものの本当の鬼絶対殺すマンだったらどうする気だったんだ。

鬼殺隊最強の弟子でカバーできると思ったのか。悲鳴嶼さんの熱い信頼に涙が出てくる。

残念、それでもやるヤツはやる。

例えば肉親とか、知性のかけらも理性もなさそうな知的ヤンキーとか、ツングレ長男とか、不器用ブラコンとか。

ひえくん、悲鳴嶼さんお人好しすぎるよお。ついでに言葉が足りなさすぎますよお。

内心、盛大に涙を流しているとあちらも悲鳴嶼さんが言葉が足りないことがよく解っているようで一からお話ししてくれた。

「いろいろ追い詰められて気がついていたら鬼を喰っていた??」

話してみると意外と常識人だった。最初、瞬殺されそうなモブだと思っただけで内心謝っていたのに!!

お兄ちゃんと一緒に見た目と中身違うねーとちよつとほっこりしていたのに!!!

話を進めていく内に雲行きがどんどん怪しくなり、鬼を喰った理由となった時には真顔になるしかなかった。

「はあ??馬鹿なの??しかもそれを続けている??やっぱり馬鹿??」

最初から鬼喰えるって知ってる訳ないもん!!

鬼とはいえ、元人ぞ??ある種の人喰いだもんな!正気でできるはずが無いよな!!!

やはり、鬼滅の世界の人間はどこかおかしい。

救いは村田さんと後藤さんしかない。尚、彼らからは怖がられて

いる模様。悲しみ。

「すみません…でも、鬼殺隊を辞めるわけにはいかないのよ」

「…刀の色が変わらなかつた剣士としての才能がなかったの？」

呼吸の適性がない。それは呼吸を使って鬼を討つ鬼殺隊にとって大きなハンデとなる。

代々剣士を輩出している煉獄家の千寿郎くんが鬼殺隊士になることを諦めたレベルなのだからそれは推して然るべきだ。

「…それでも、俺は辞めません」

「鬼殺隊は剣士でだけで成り立っているわけじゃないわ。後衛に周ろうとは思わないの」

呼吸を使わずに鬼を殺そうだなんて自殺行為だ。

それを解つていても尚、鬼殺隊を辞めようと思わないのならば他に選択肢はある。

鬼殺隊には隠という存在がいる。

剣の才能がなかったが、それでも鬼殺隊を去らずに戦いたいと願つた者によつて構成されている。

才能のない弟くんにとっては今後、生き残るために現実的な選択肢だ。

だけど、悲鳴嶼さんの弟子をやっている時点でその選択肢を選ぶ気はないし、今後も変えるつもりはないだろう。

「……」

だが、彼が返すのは無言で私はため息をつくしかない。

「それは、不死川さんが関係しているのかしら」

私が不死川兄弟についてある程度は知っているが、詳しくことは知らない。

そのこの話を読む前に私は“私”となったからだ。

一応、公式ファンブックチラ見したことと人伝に聞いた話と実際に会つてそうではないかと思つているがそれだけだ。

「それは…」

「兄弟喧嘩に首を突つ込むつもりはないわ」

まさか聞かれるとは思つてなかつたらしく、私の指摘に息を飲ん

だ。

いやいや。まさか隠し通せると思っただのか。

不死川はクツソ珍しい苗字なんだぞ。

この世界はなさそうでも本当にある苗字をよく採用されている。主要人物である鬼殺隊士の上位とか、主人公の同期とかがそのいい例だ。

そんな中、親戚でもないのに苗字が被ると思うか？あるわけないだろう。

観念したように話をしようとするが別に聞きたわけじゃない。おおよそは知ってるし。

私が言いたいのはそういうことじゃないのでバツサリ切り捨てる。「生き残るために手段を選ばないことは責められることではないわ。だけど、それを日常とするのは間違っている」

私は生き残るためには何をやってもいいと思っっているし、出来るのはともかく実際に推奨しているのでそのことについて否定する気は一切ない。

だが、鬼喰いはダメだ。

鬼絶対殺すマン（ガチ勢）にその姿を見られただけでブッコロ案件だ。

実際に主人公が介入しなければ彼の両目はお亡くなりになっていた。

その力に頼ってばかりいたらいつまで経っても話し合う場を作ってはくれない。むしろ引導を渡すためにさらに苛烈になるだけだ。

「あなたがここに入ったのは不死川さん…お兄さんが関係しているのではと何となく察するし、何をしようと思っっているのかも…まあ、ね…」

だからこそ、悲鳴嶼さんは彼を放っておけなくて弟子にした。

素晴らしき兄弟愛だとかいって滂沱の涙を流している姿が容易に想像できる。

「でも、それはあなたの命をドブに捨ててでもやるべきことなの？
生き残るために必死で手段を選べない状態で為せることなの？」

顔を両手で挟んで彼の目を見て言う。

絶対に逸らすなんてことはさせない。お互いのためにもそれだけはさせてはならない。

「考えなさい。それがどういう意味なのかを。あなたが不死川さんを家族だと思っっているのなら尚更」

愛しているが故に。

家族であるからこそ。

この兄弟はどうしようもなく不器用だ。

互いを思っているから、変な方向に入れ違う。

本当に夕方時に河川敷で殴り合っつてこいと思う。

「じゃあ、約束通り検診を始めましょうか」

今までの話はなかったように私は検診を始める。

私はさっさと殴り合いしてでも本心ぶちまければいいと思っっているが、これ以上は他人である私が踏み込む領域ではない。

私の言葉にどう思い、考え、選択していくのかは彼ら次第だ。

ただ、これからの出来事を知っている私としては後悔のない選択を。としか言えない。

残された時間は少ないのだから。

愛しているが故の嘸

「弟さんの目を潰そうとしたらしいですね」

「テメエ：何の面下げてここに来た」

柱合裁判で薄々分かっていたことだが、不死川さんと彼は相性が悪い。

どちらも長男なのに：いや、長男だからこそ相入れないのかもしれない。

上から正式にお叱り＋接触禁止令が出たと耳にした私は気晴らしに出ることにした。

勿論、行き先は風柱の不死川さんの屋敷だ。

アポイントは取っていないので富岡さんではないが賄賂おはぎを持って少しでもご機嫌取りをしようと思うが多分、逆効果かもしれない。

半殺しか皆殺しか。(勿論、餅のつき具合のことだよ) 迷った末に半々にすることにした。

食べなかつたら私が食べればいいだけだし。

柱稽古で人がひつきりなしに来ているので戸を叩いても反応なし。

困った私は不可抗力だと断って屋敷に上がる。様子を見ると稽古中だったようで。

これは反応しなくて当然だと思った私は台所に行ってお茶の用意をする。

お八つ時には休息を入れるだろうし、何よりおはぎのお供にお茶は必須じゃないか。

此処が先日の喧嘩で被害があつた場所かと時間を潰し、休息が入つたのを察知した私はお盆におはぎとお茶を乗せてひよっこり今日は。冒頭に戻るのである。



不死川さんはグルグルと唸って私を威嚇する。

先日の緊急柱合会議での毒舌で私のことがはつきりと嫌いになったようだ。

アレはお館様が悪いんだけどなあ…

許すつもりはないので弁明する気は一切ないけど。

私って意外と根に持つタイプなのだ。

知ってた？それもそうだろうね。姉の仇を死んでも殺すと思っていれば察するよね。

ちなみに後継者を拐おうとした宇髓さんのことも許していない。

手塩をかけて育てた可愛い可愛いうちの子をよくも拐おうとしてくれたなあ？

「様子をのぞきにきました。柱稽古は順調ですか？」

これ差し入れですとお盆を差し出すとじつと見つめるので要らないなら処理しちゃいますねと告げると引き取ってくれた。

おはぎ大好きマンは嫌いな人物からのおはぎを受け取らないという選択肢はなかったようだ。

あれ…？でも不思議だな。富岡さんからのおはぎは絶対に受け取らない気がする…

「それで、弟さんの目を潰そうとしたと聞いたのですが本当ですか？」

「…俺に弟はいねえ」

改めてお話をしようとするが弟なんざいないと容疑者は容疑を否認しており…

でも、ぶつちやけムリなお話なんですネー

意外と似ているんですよ、この兄弟。

目はそっくりだし、力で解決しようとするところも、目的を達成するために手段を選ばなかったりするとところも。

あと不死川というクツソ珍しい苗字を名乗っておきながら親族じゃないですかバカですか？

全国に10人くらいしかいないの…？白を切るのにも無理があるってもんですよ。

「ふーん、そうですね。」

そういえばカナヲには最終選別でかなた様を殴った同期がいるとかいないとか。

ですが、そんな同期も立派な男の子。今は思春期に入られたよう
で女の子とまともに会話できないとか」

「御息女を、殴った？あの野郎……！」

「まるで、叱らなければならぬご兄弟がいるようですねえ……」

兄弟はいないとおっしゃる不死川さん？」

誰がとは全くもって言っていない話だが、
不死川玄弥のことであるかまぼこ隊の面々ではないと一瞬で判断した不死川さんは今度会
たらぶん殴ると意気込んでいる。

弟はいないと言っていた口の根も乾かない内の見事な掌返した。

煽るように指摘するとすごい顔で睨まれた調子に乗った。反省反
省。

「でも、分かりますよ。その気持ち」

「はあ？テメエに何が分かるー」

「愛しているのでしょうか？家族を」

突然の同意に激昂しかけた不死川さんだったが、被せるように放
た言葉に沈黙する。

その様が何よりも語っている。

「大切な、大切な、愛する家族ですもの。死と隣り合わせの場所には居
てほしくないですよね」

「……私も同じ気持ちです。」

「……………」

告げる言葉は彼の中にストーンと落ちたのか無言でお茶を啜った。

その姿を横目に湯呑みを撫でる。

…茶柱ないかなー？

おねーさんシリアス嫌いだからなー茶柱で場を和ませて欲しい。
切実に。

「死んでほしくないから、幸せに生きてほしいからー……
弟は居ないと嘯いた
突き放した」

「目を潰そうなんて狂気の沙汰。だが、死ぬよりはマシ。そんな思考だったのでしょうか？」

もし、私が不死川さんの立ち位置だったのなら。

もし、私が不死川さんのような人だったのなら。

恨んでくれて良い。家族じゃないと嫌われたって良い。

私はきつと、あの子を再起不能にしただろう。

「だからこそ仲直りはした方が良いですよ」

「はあ??」

私はこの先に起不死川玄弥が死ぬことこることを知っている。

もしかしたらそれは起きないことなのかもしれない。

「死と隣り合わせな世界こんなざく時世ですもの。絶対なんて事は無いんですよ」

だけど、ここは絶対鬼滅に死なない事は無い世界なのだから。

「人間は何れ死にます。それが人によって早いか遅いかだけ。兄だからと言って、弟よりも早く死ぬ保証は無い。逆もまた然り。」

その時に、貴方は後悔しませんか？

もつと兄弟らしい記憶が欲しかったと悔やみませんか？」

「……………」

湯呑みに視線を落とす不死川さんには普段のキレツキレツなヤンキーらしさが見当たらない。

しかし…普段から知的ヤンキーなどところを見せればいいものをと
思うのは私だけですか？そうですか。

「それに、彼の気持ちも少し分かりますから」

どういう事だと首を傾げる不死川さんに意外と知らなかったんだとクスリと笑う。

「私はカナヲの姉ではありませんが、その前に姉花柱さんの妹でしたから」
姉であり、妹であった私はどちらの気持ちも分かる。

「上が『死んでほしくない』『幸せに生きてほしい』そう思っていると同時に下も思っているんです。幸せに生きてほしいだなんて…大切な家族が欠けているのに幸せになれるはずないんですよ」

「とても頑張っている背中を見ていたから。どんなに傷ついても踏ん

張っている姿を見ているから。憧れるのはやめられない。自分もとその背中を追いかけるんです」

兄を傷つけた言の葉を謝りたくて彼はここに来た。

その想いの奥底には憧れがあったのかもしれない。同じ立ち位置で互いを守りたいと思っていたのかもしれない。

だから彼は鬼を喰らいこの世界にやって来た。

「だからこそ仲直りはするべきです。貴方が後悔しないように。弟さんが後悔しないように」

誰も喪っていない人がこの世界に足を踏み入れる事は殆どない。それはつまり――

「貴方も知っているとありますが、喪ってから後悔するのは遅いです。愛しているのならば尚更」



散々言いたいことを言った私は不死川邸を辞した。

あれからおはぎにも手をつけなくなった不死川さんは何を思っているのだろうか。

静かな屋敷を見上げてずっとずっと底に溜め込んでいた言葉を吐き出す。

「人のこと、言えないんだけどね」

私はとても愚かな姉だ。

私はとてもバカな妹だ。

――幸せに生きてほしいだなんて…大切な家族が欠けているのに幸せになれるはずないんですよ。

理解していても、思っていてても、行いを正そうとしないのだから。

本編

何れ死ぬことを自覚した私の話

見ていられなくて人買いから奪うように買った女の子。

その子は自分から行動できなくて、言われたことしかできなかった。

そんな彼女に姉はコインを渡した。決められないことがあったらコインを使つて決めればいいと。

私は憤慨した。

姉は能天気すぎる。だって、そうだろう。そんなことしたら彼女は一生コインによつて物事を決めるようになる。

そう私は憤慨したのだ。

だけれども、どうにも既視感を覚えた。

私はどこかでこの場面を見たことがあると。

一体、どこだろうと記憶を遡つて、遡つて……

私はそう遠くない未来で死んでしまうことを思い出した。

「ハロウィンで鬼滅コスする人の中に玄弥と無一郎がいたらみんな泣くよねー」

本誌を全く読んでいない私は全くもって分からなかったが以前、時透推しの知り合いがお兄さんがチラチラ見えて連れて行かないでと内心叫んでたと話してたことを思い出した。

「今週のやつのネタバレをな、食らってしまつてな……心がしんどい」
つまりは、二人とも安らかに眠れである。

『鬼滅の刃』

それは某少年誌で連載される最近では類を見ないほどの味方側がぼこぼこお亡くなりになる大正剣戟奇譚である。

鬼の中で推しを見つけたらその数話後には殺され、かといって主人公側で推しを見つけても少ししたら死んでしまう。

箱推しでも辛いのに、個人の推しだったらもつと辛いというか多分地獄。でも、好きだから分かっているも推す。誰かを推すのは呼吸と同じ。オタクとはそういうものである。

そんな私はどこにでもいるようなアニメを嗜む程度のオタクだった。

アニメから始まり、単行本を少し、公式設定集を軽く。ゆくゆくは読破したい所存。

――

そんなふうに思っていたのに気づいたら此処にいた。

私はそのことに違和感を覚えずに紆余曲折しながらもすくすくと成長し、今に至り漸くその事実を認識した。

即ち、私は後の鬼殺隊柱が一人、蟲柱 胡蝶しのぶであると改めて認識したのだ。

「…しのぶ、いきなり真顔になってどうしたの？」

不思議そうに小首を傾げるのは現鬼殺隊 花柱 胡蝶カナエ。後に故人となる人物であり、私、胡蝶しのぶの実の姉。

「…？」

そんな姉の腕の中で同じくこちらを見るのは後に私の継子になる栗花落カナヲ。私のもう一人の家族。

「…なんでもない。それよりも姉さん、それはその子のためにならないわ」

「え〜カナヲちゃんは可愛いから大丈夫よー」

何を言っても可愛いから大丈夫と謎の理論を發揮され、これ以上何を言っても無駄だと再実感した。

呆れたようにため息をついて部屋を出た“私”は自然に見えただろうか。

「はあく胡蝶しのぶかあ……マジかあ……」

部屋から蝶屋敷。蝶屋敷から人気のないところまで出た私は周囲に誰もいないことを再確認してひとまず胸の中にしまっていたものを吐き出した。

胡蝶しのぶは原作開始時では数少ない女性の柱だ。柱の中で唯一、鬼の頸を切れないと自称していたがそれでもそれを物ともしない方法で柱に上り詰めた人間だ。

彼女はいつも笑みを絶やさずに「鬼と仲良くすればいい」と言っていた。

それは死んでしまった姉が鬼に対して哀れみの情を向けていた。その思いを引き継ごうと思うものできずにせめて姉が好きだと言っていた笑顔を絶やさないで仮初めであるものの姉の遺志を継いだと示していたはずだ。

肉親を殺された憎しみと姉の慈悲深い遺志の板挟みになって鬼に對してのみ愉快的な鬼畜になっていたが。

そんな彼女は無限城で仇である上弦の弍に殺されながらも殺すという結末を迎える。

そう、殺されてしまうのだ。姉も、自分も。生き残るのは血の繋がらないもう一人の家族であるカナヲだけ（今の所は）。

二次創作でよくある原作の流れを変えることはできるのかと私は考える。

答えはきつと是。

此処は実在する世界だ。胡蝶カナエも、胡蝶しのぶもちゃんと実在する人物だ。たまたま自分がこの世界と同じ世界観を持った創作物のことを思い出しただけなのだ。

だから、**私**が知っている原作と同じ流れになる保証はどこにもない。むしろ違う流れになる可能性の方が高いかもしれない。

一番の死亡回避は鬼滅隊に入隊しないことかもしれないが、それも無理だ。

両親は鬼に殺され、残ったのは私たち姉妹。姉は自分たちのような存在をこれ以上出さないために鬼殺隊に入隊した。

私も死ぬのは嫌だけどそれと同じくらい、自分たちみたいな存在を作りたくない。

それ以前に私たちはもう鬼殺隊に入隊している。姉に限っては柱になっている。

「大丈夫、大丈夫：例え、人間に対して厳しい世界だとしても姉さんも私も殺されない。殺させない」

となれば、できるのは上弦の弐に鉢会わないようにしながら強くなることだ。

やる事が決まればあとは鍛錬をするのみ。

姉たちが蝶屋敷に居ないことに気づく前に帰らないと。

「大丈夫、私は胡蝶しのぶ。胡蝶しのぶはやれば出来る子。だから、大丈夫」

そう思った私は最後に己を鼓舞して今度こそ気づかれる前に蝶屋敷に帰った。

何れ死ぬ私が運命に抗おうとするが癒される話

自分が鬼滅の刃の胡蝶しのぶであると自覚してから数週間が過ぎた。

最初は「私」が私でないことに気づかれないか内心不安だったが、楽観的な姉や出会ってから日が浅い妹が気づいた様子を見せないのでもう開き直っている。

そして、家族の中で一番死亡フラグが立っているであろう人物は：「しのぶは最近、頑張り屋さんね。私も頑張らないと！」

あの日から鍛錬に力を入れる私の姿に刺激されたのか同じく鍛錬に力を入れていた。

その姿を横目で見てよしよしいぞーと内心ほくそ笑んでいたがはたと思い出す。

確か、胡蝶カナエは上弦の弍に騙し討ちされたのでは??

ちゃんと読んだかネタバレ読んだのか忘れてしまったが彼女の最期は

↓↓以下超絶意識↓↓

「鬼と人、仲良くしたいよね」

「ウンウン。そうだよね、僕も人を救いたいよ」

「あら?もしかして話が合うひとかも…」^鬼

「最初は怖がられるけど吸収したらきちんと救われるんだよ!」

「どうしましよ全然話を通じない…」

から戦闘。致命傷を受け喰われそうになるが夜が明ける寸前だったため、惜しまれながら撤退。そして間に合わなかった私が到着し、言葉を交わしてご臨終だったはず…

サイコパスは話を通じているようで通じてないので騙し討ちされたとは断言しにくいがそうだったと思う…!

……ということはもしかして意味がない?

最後の最後で鬼を倒す強さは必要だから完全に意味がないとは言えないが、その前に「もしかして同じ意見を持った人：？」と思った人物にホイホイ心を許すなという方が先なのでは??

「……………」

「しのぶ?」

突然、素振りをやめた私に疑問を思ったのか姉が私の顔を覗き込む。

「私…姉さんの将来が心配なの」

「いきなりどうしたの…?」

いきなりすぎる私の話には困惑しながらも話を聞く態勢に入った。もう、こうなってしまうえば思いついた勢いに任せて言ってしまう。

「ずっと前から薄々思っていたの…姉さんは楽観的すぎるって。優しいのは美德だわ。楽観…前向きなところも……………」

そう前からうつすらと思っていたのだ。

ただ、その時は姉さんに群がる虫は私が振り払えばいいと思っていた。思えば私も楽観的だったのだ。そうも言ってもらえない存在上弦の式がすぐそこにいると自覚してから早急に反省した。

「それが姉さんの魅力で今更直せるとは微塵も思っていないけど不安なのよ。いつか…いつか、姉さんが…騙されてしまうか心配でならないの!」

「姉さんは警戒心がなさすぎるわ!世の中の人間は姉さんみたいに優しくくないの。騙すために同調するやつだっているんだから警戒心の一つくらいは持つておくべきよ!」

サイコパス上弦の式の甘言に乗るなどピンポイントに言えないのでとりあえず他の者に対して警戒心を持つべきだと伝えておいた。

ちよつと私が人間不信に陥っているように見えなくもないが姉を死なせないためにも背に腹は代えられないので甘んじて受けることにする。

「うーん…ちゃんとしているつもりなんだけどなあ…」

どこが???

がつつり、人買いに舐められそうになってたやん。

スンと真顔になった自覚はある。でも、私は悪くない。

「でも、しのぶがそういうなら姉さん、頑張るわ」

両手を握り拳にして頑張るといふ姉さん可愛い：じゃなくて柱であるし、本人もそう言っているから大丈夫だと思いたいがどこことなく漂うフラグにそこはかかない不安を覚える。

「だから、大丈夫よしのぶ。貴女が不安に思っていることにはならないわ」

そう言っ頭を撫でる姉をただただずるいと思った。

そんなこと言われれば大丈夫だと思ってしまうではないか。

そんなこと言われたら、もしかして起こるかもしれない未来を知っていないながら何も言わない私がとても罪深い存在だと思ってしまうではないか。

「…姉さんはずるい、わ」

「しのぶ…」

あ…と思つた時にはもう言葉が溢れた後だった。

どうしよう…：「私」らしくない。私が「私」ではない事がバレる

！と内心、大慌てしていたら姉がよし！と声をあげた。

「鍛錬はもう終わりにしましょう！」

「は??！」

異論は認めないとばかりに剣を取り上げた姉は妹を呼ぶと手を繋ぐ。

混乱していると呼ばれた妹が到着し、姉は反対側の手で妹と手を繋ぐ。

「これから一緒にご飯を作ります！」

「??？」

突然の宣言に何を考えているのだろうと疑問符が乱舞した。

「ご飯を食べたら一緒にお風呂に入ります！そして今日は三人一緒に寝ます!!」

「一緒に食べるのはいいけどこの歳で一緒に寝るのはちよつと…」

「いいからー！いいからー！」

「ご飯を作ろうと意気揚々と進む姉に引つ張られながら遠回しな拒否をしても姉は聞く耳持たず。」

私の意見は黙殺され、気がついたら川の字になって寝ていた。

普通なら妹が真ん中であるはずなのに何故か私が真ん中になっていた。

「なんでや」

「ご飯？」

みんなの好物作りあつて食べたよ。生姜の佃煮美味しかったです。

何れ死ぬ私が運命に抗おうとする話

あの後、普段言わないことは絶対言わないと心に誓った私であったが、少し真面目に考察しようと思う。

『鬼滅の刃』って実を言うと時系列がはつきりしない。

いや、他の漫画もそうなんだけどこっちは前世の記憶って奴が公式であるためごっちゃになりやすい。

え？全然？

すまん。私はなる。むしろ流れてきた過去捏造のエモいイラストを無意識のうちに組み込んでしまう。公式が発表したら泡沫になるがそれまでそれが過去なんだよおお！となる。

だってみんなむちゃくちゃ考えている。どうしたらそんなことを思いつくの？

尊い。感動をありがとう。報われる全員。

あーあ、あのイラストはどこ経由で流れてきたのか。熟読して好きを押さなかったのが悔やまれる。脳内に保存してもいずれ劣化するのとは分かりきったことなのに私の馬鹿。

脱線した。話を戻そう。

さて、正直に言ってしまうか。

姉がサイコパスと出会う時期が分からない。

妹引き取る時はまだ邂逅しないのは分かっている。むしろ、もう通り過ぎた。ただ、そこから先は飛びに飛んでもう今際の際なんだよ。

アレの消息もある程度知っているけど姉との邂逅前の消息は確か堕姫たちを鬼にした事だったはずだから…いや、まだ生まれてねーよ。

あとは伊之助のお母さんか？うーんでも伊之助、赤子でしょ？妹と同期だし、遙か過去の出来事か。

反対に考えてみようか。恋柱である蜜璃ちゃん。

彼女が鬼滅隊に入隊したのは原作開始から2年前。その頃には多

分、姉は死んでいる。

蜜璃ちゃんと「私」がいつ会ったのかは知らないが、笑顔を絶やさない胡蝶しのぶに対して違和感を持っている様子が見えなかったの
で胡蝶カナエとは出会ってないのだろう。

うーん、ちょうどブラックボックスな空白期間なんだよなあ。

結論、分からない。

散々、記憶を捻り出したのに分からないで終わるなんてとても遣る
瀬無い。

もうこうなったら姉を一人にさせないようにしないとして感じた。

ひつつき虫は流石に呆られるし、上手いことするしかないな。

姉が殺されたのは住宅街っぽいし、アレのテリトリーであるなら
ら極楽教とやらの範囲内と墮姫のテリトリーである吉原周辺に任務
で行くことがあればついて行こう。

後はどうやって姉をサイコパスと引き合わせない。もしくはサイ
コパスに殺されないかだが。

正直言つて今の私じゃあ、足手纏いだ。

少しでもそうならないために日々鍛錬だが限度がある。今の私は
花の呼吸の使い手だが、如何せん筋力のパラメーターが『振るう力』に
あまり振られてないのでほぼ頭打ち。

原作から見ると多分、幾分か早い蟲の呼吸に徐々にシフトしている
が、柱の胡蝶しのぶでも死ぬ前提でやっとな殺せたアレを今の状態で殺
すなんてとても出来そうにない。第一、私まだ毒使いでない。

姉と共闘したらどうなるのかはちよつと分からない。邂逅の仕方
によつてはイケるかもしれない。それほどアレの能力はチート。な
んだよアレ。接近戦を長時間すれば敗北必須じゃないですか。やー
だー。

と言うことで今のところ、姉とサイコパスを引き合わせないように
全力を注ぐ所存。

勤務時間が深夜帯といつても夜が明けるまで働くとかダメです。サクツと終わらせてお家に帰りましょう。理由？夜更かしは女の天敵なんですよ？

更に保険として他の柱の行動を把握しておこう。

特に姉の担当地域のご近所さん。もし、邂逅してしまっても柱二人とプラスαでなら殺せると信じたい。

こちらの勝利条件は姉の生存。

だが、あのサイコパスのことだ。邂逅してしまえば生きていれば地の果てまで執着する。

だって鬼殺隊士の中でも少ない女隊士の上に更に少ない柱やぞ？しかも美人。

奴が姉が柱だって知っていたかは微妙だが出会えば絶対喰う。見逃すとかありえない。

それだけは確信して言える。確信して言いたくないけど。

つまり勝利条件は姉の生存だが殺す前提でいかないとつてことだ。

何ソレ、無理ゲーって思うかもしれないが死ぬ気でやれば運命だって覆せるんだよ。

死ぬ気でやれば運命だって覆せるんだって言い聞かせんだよ。

え??最初期で原作と同じ流れになる保証はどこにもない。むしろ違う流れになる可能性の方が高いかもしれないってたじゃん？

いやいやソレは希望的観測。

原作と同じ流れになる保証もなければ違う流れになる保証もない。正しくシュレティンガーのネコ。

だったら、違うと信じながらそうだった時の対策をするのは至極当然。

なので今日も元気に鍛錬に精を出してそれとなく姉について行って柱の所在を探り探りしながらご機嫌伺い。

「最近、ずっと一緒に任務ね」

「家族だし、継子だし、当然よ」

姉の疑問に当然のように返せばそれもそうねと笑う。

「…私だって姉さんを守りたいのよ。だから、姉さんを超えるわ」

とってつけたような理由は本心でもある。昔から姉さんに憧れていたのは事実だし、守りたいと思ったことも嘘じゃない。思い出す前も後も。

私の言葉に姉はうんうんと頷く。

「鍛錬頑張っているものね。それに他の柱の人たちと積極的にあつて
いるものね」

やだ、すっかり見てくれるなんて嬉しい…じゃなくてこれでこの行動について姉が疑問に思うことはないだろう。

柱の人たちは多分、私が柱になりたいと思いつながら邪な気持ちで近づいているのを知っている。

悲鳴嶋さんに生暖かい目で見られているし、いつも泣いているけど更に泣いてたから。

ちよつと心が痛いけど、これも全部私の家族を死なせないためだ。傲慢かもしれないが家族の運命も覆せない者が他人の運命を覆せるわけがないのだ。

姉の死亡フラグを叩き折ったら他の人たちの死亡フラグもできるだけ叩き折るからそれで許して欲しい。

「しのぶはとても頑張っているわ。でもねー」

「早く終わらせましょ。屋敷でカナヲが待っているわ」

意識を任務モードに切り替えていたら丁度、姉のお話の途中だった。

「…ええ、そうね。早く終わらせましょうか」

やっちまった…と思うものの今更、聞き返せる雰囲気じゃない。

姉も続きを言う気はないみたいでカナヲちゃん、ちゃんと寝ているかしらとカナヲがきちんとお留守番できるかに関心が向いている。

「…寝ていてってカナヲに言ったからきつと寝ているよ」

『あなたは頑張っているけれど、本当に頑張っているけれど…』

『多分しのぶは…』

胡蝶しのぶの回想が頭によぎる。

きつと、その先に進む言葉は『あの鬼に殺される』だろうか？それとも『倒すことはできない』？

そして今、姉が言おうとした言葉の続きはきつと「柱になれない」だ
と思う。

：解っている。胡蝶しのぶのアレは自称ではなく、事実だ。

このまま行くのならば鬼の頸を切れないと言う問題はすぐに直面
する。

その時、姉は私に剣士ではなく医療従事者の道を示すだろう。

毒を使えばその問題はなくなるが、心優しい姉のことだ。毒に侵さ
れた鬼の末路を見れば止めることは分かりきっている。

解っているのだ。この世界が残酷なほどに人間に厳しい世界だと
言うことを。

それでも、私は。

私は自分の望む結末を手に入れるために運命に抗うのだ。

何れ死ぬ私が運命に抗っている話

そうだ。刀を改良しよう。

ゆくゆくは花の呼吸からその派生、蟲の呼吸に完全シフトすると
言った。

派生といえども違う呼吸。一から作るのは時間がかかると思うだ
ろ？

しかし、そこは原作知識。型のイメージならもう出来てるんだなこ
れが。後はそれを再現するだけ。

しかも身体の動かし方はちゃんと理解しているようで…想像して
いたより早くなりそうなのだ。

「前から思っていたのだけどやっぱり、しのぶは刀を『振るう』よりも
『突く』方が向いているのよね」

柱である姉の言である。

原作だつてそうだったし、姉のお墨付き。

もうこれ、全力で刺突^{蟲の呼吸}方面に進むしかないよね？全力で進むべきだ
ね。

と、言うことで鏖鴉に「刺突特化の刀が欲しいです」と認めた文を
託して刀鍛冶の里に行つてもらつた。

まだ一般隊士とそう変わらない地位だから鍛冶担当によつては順
番待ちと突つ返されるかもしれない。

一応、姉の継子なのですぐ対応されると思いたいなあ…

まあ、刀なんてすぐに出来る代物じゃないので気長に待ちつつ、今
日も鍛錬、鍛錬と言いたいところだが。

私、住んでいるところ、蝶屋敷。

蝶屋敷、負傷した鬼殺隊士が来るところ。

つまり、診る人や看病する人が必要なわけで…今日はこちらに専念
しようと思う。

今までは鍛錬の合間合間にやっていたのだが、最近はそうも言つて
られない様子。

私は医療従事者ではないけれど胡蝶しのぶはそっち方面に関しては今の段階で姉を超している。

「私」が私になってもそれは変わっていなくて呼吸と同じく身体は覚えているみたいだ。

人様の命を預かっているんだから内心、おっかなびつくり対処していたがそろそろ本腰入れておさらいしなくては。

ついでに毒もとい薬生成についての勉強も更にしておこう。

心優しい姉に見つかればきつと怒られるが、保険だ。姉が生きてるうちは使う予定はないし、表に出さなければバレない。

それにまだ準備学習期間だから姉もいい方向で勘違いしてくれるはず…。

だって毒だって用法用量をしっかりと守れば薬になるんだぜ？

藤の花の毒をどうやって薬にするんだってツツコまれれば終わりだけど、まだ藤の花には手をつけてないから。

患者をバツサバツサと捌きながら鍛錬、任務。そんなもって研究。

細かいところは蝶屋敷に住んでいる子達に任せたりしているけど、それでも我ながらオーバーワーク。

それも山場姉の死亡フラグを叩き折るを超えるまで。大丈夫、私なら乗り越えられる。

「しのぶ、最近働きすぎじゃない？少しは休んだらどうかしら」

「大丈夫よ、姉さん。もう少しで終わるもの」

姉の進言にそう返すと背中から抱きつかれた。

一瞬、カナヲだと思ったけど今のあの子にはそうするという思考がない。

遅れて香ってきた花の香りにああ、姉が抱きついてきたのだと理解した。

「大丈夫よ、姉さん。今はちよつとやりたいことが多いだけだから」

いつ終わるか分からない『もう少し』と『今』。

すぐに終わるわけがないと分かっているながら、すぐに終わると気休めにもならないことを言う自分に嫌気がさす。力がない自分が憎らしい。

それでも、私は。

「全部片付けたら、カナヲたちと一緒ににお出かけしよう。きっとカナヲも喜ぶ」

「……………そうね」

姉と私、そして妹。三人が揃っている幸せな未来を望んでいるのだ。

「それなら次の春にお花見に行きましよう。鬼殺隊士だけでも女の子だもの。いっぱいおめかししない」と

姉はどんな着物がいいかとまだ先のことなのに想像を膨らませる。

「しのぶはきつと薄紫色が似合うわ。それならカナヲちゃんは薄紅色かしら？うーん…悩むわね。二人とも可愛いから何を着ても似合いそう」

「姉さんの着物は？」

「私？私はいいのよ。二人が可愛いくて楽しそうだったら何でも」

「…着飾るなら姉さんも着飾らないと楽しくないわ」

私の漏れた呟きに姉はキョトンとして。なら、しのぶが楽しめるように私もおめかししないとねと破顔した。

花が咲くような笑みに同性であり家族でありながら見惚れてしまっている。いそうになる。

この姿が見れる日がずっと続けばいいと心の底から願った。



相変わらずの姉の美人さを思い出しては幸せを噛み締めて目の前の代物に手を伸ばす。

私の文に目を通した刀匠がわざわざ此方に来てくれて私の要望に沿った刀を作ってくれた。

製作者は鉄地河原鉄珍。

いやいや、里長が何で此処まで来てんの。こっちが趣く側でしょ。しかも刺突特化の刀だぞ？まだ毒調合の仕掛けつけてないんだぞ？普通、他の刀匠でしょ。

まあ、最終的には里長しか作れないような機能追加する予定なので関係ないけど。

断りを入れてから新しい刀を鞘から引き抜くとどこことなく見覚えがあるような形だ。

これがあれこれされて最終的には毒調合のからくり仕掛けの胡蝶しのぶの刀になるのだと思うと感慨深い。

かるーく振ってみてもイイ感じ。

流石、里長。良い仕事しますね。

刺突特化の刀と言う注文は中々無いらしい。そら当然だろうな。突くことを主眼に置いている隊士は胡蝶しのぶくらいだし。

なので、不備があれば言ってくれとのこと。

わざわざ来てくれた里長に診療所だけでも出来る限りの歓迎をして帰ってもらった。

里長を長時間、里から離れさせるのも…かと言ってすぐにお帰りいただくのも…と言うジレンマがあったので短時間だが。

と、言うことで私は新しい刀を手に入れた。

段々と蟲柱の胡蝶しのぶの装備が出来上がってきているが、姉の死亡フラグを叩き折れば問題ナシ。

新しい刀も手に入れたことだし、手に馴染ませるためにも鍛錬、鍛錬。

「もう花の呼吸とは言えないわね。どうかしら？新しい呼吸を作ってみたら」

「ええ、そうするわ。花の呼吸が元だし、突き技が多いから…：…蟲の呼

吸とかはどう？」

姉の進言にさも、今思いつきましたとばかりに提案。

あら、良いわねと賛同のお言葉をもらえたのでこれからはどんどん、蟲の呼吸を宣伝していこうと思います。

よし、死亡フラグを叩き折るためにも頑張るぞー!!

何れ死ぬ私が運命に抗えなかつた話

引き取った家族だけど蝶屋敷にいるのだからと妹に医学を教え込みながら今日も鍛錬に診察に研究です。

こう多忙な日々を送っていると季節が過ぎるのが早い。

今は秋の初め、服の隙間から流れ込んでくる冷たい風と紅く色付く樹に秋だなあと感じる。

蟲の呼吸を体得してから階級は少し上がったがやはり、鬼の頸を切るのに苦戦するせいかしばらく横這いだ。

姉は何と言えば良いのかオロオロしていたが、最終的には階級なんて気にする必要ないわと少々の外れなことを言っていた。

もともと階級はさほど気にしていなかった。正直、あのサイコパス上弦のを殺せるのならばどんな階級でも良いのだ。

私に気がしているのは頸を切るのに苦戦することだ。

姉の気遣いを嬉しく思いながらもどうすれば頸を切るのに苦戦しないか模索する。

一番手っ取り早くて確実なのは藤の花の毒に手を出すことだ。

しかし、それは心優しい姉がいるから躊躇われる。

それに胡蝶しのぶだって毒は諸刃の剣だって言ってたし。

投入時期見誤ると十二鬼月に完全に対応されそう。

姉の死亡フラグを叩き折るためには躊躇なんてしてはいけないと解っているのだけれど出来ればこれ以上、姉を悲しませたくないというジレンマ。

一度、毒に手を出してしまえば、完全な抗体ができて効かなくなってしまうまで使い続けることは目に見えている。

途中で止めるといふ選択肢はない。

お館様は鬼舞辻無惨を自分の代で殺すことにご執念だから。

私が彼の人の立場だったらそう判断を下す。

姉を悲しませたくはない。だけど死亡フラグは全力で叩き折りたい所存。

何というジレンマ。何という矛盾。

うーん：思考の袋小路にハマっている気がする。

こういう時って考え過ぎるのが良くないって言ってたよね？

ちよつと無心になるために素振りしてくる。



うんうんと鍛錬で悩み、診察をして任務をこなして、今度はうんうんと研究で頭を悩ます。

いくら胡蝶しのぶが医学および薬学に精通していたとしてもその知識を実践する私は医学のいの字もないので遠回りもしばしば。

原作ではその様子が一切ないのでこればかりは合っているのか不安になりながらも知識に身を任す事しかできない。

「しのぶさんは凄いつて改めて実感するなあ…」

最初に彼女を見たときは笑顔であんなことを言うのでちよつと苦手だった。

まあ、その後で彼女のことを更に知ったので最初ほど苦手だと思わなくなったが。

ゴトリ、と何かが崩れる感覚で顔を跳ねあげる。

「……ああ、寝落ちたのか」

キョロキョロと周りを見回すとつい先ほどと寸分変わらない景色。

だけど、照明であるロウソクの灯りが絞られている。

そこでようやく、自分が寝落ちしたことを自覚する。

羽織った覚えのない羽織と灯りを絞った覚えのない照明。

私が寝落ちしている間に姉が様子を見に来たのだろう。

どのくらい寝ていたのか分からないがもう就寝すべきだろう。

腕を上げて伸び上がるとバキバキと小気味いい音が鳴る。

寝る前にもし姉が起きていたらに一言お礼を言わなくてはと廊下をそろりそろりと歩いて姉と妹が使っている部屋に顔を覗かせる。

「……………」

そこにいたのはまだ起きていた姉ともう寝ている妹ではなく、寝ぼけ眼の妹と準備されているが使われた様子のない布団だった。

思わず浮かべていた笑みを固める。

きつとちよつと部屋を出ているだけだと部屋を見回す。

「……………」

ない。

姉の刀も、蝶のような羽織も。

「ねえ、カナヲ。姉さんがどこに行ったか知っている？」

どうしようもなく嫌な予感がする。

声が震えないように、穏やかに聞こえるように努めながら所在を知ってそうな妹に問う。

「…見回りに行ってくるって」

この予感がどうか間違いであってほしいと心の底から願っていたが、儚く散った。

「……………そう、明日も早いのだからカナヲはもう寝てなさい」

うんと素直に布団に潜り込む妹を横目に襖を閉めた。

日が登るまでにはまだ時間はある。

私は急いで部屋に戻ると最低限の物を引つ掴んで外に飛び出た。

妹は見回りだと言った。ならば、そう遠い場所までは行っていないだろう。

付近の地理を脳内に思い浮かべながら姉が行きそうな場所を探す。

杞憂であればそれで良い。でも、どうしようもなく悪い予感は続く。

何処だ。何処にいる。

駆け回っても見つからない。空が段々と白んできて私の焦りが更

に募る。

——幸せの時間が壊れる時、いつも血の匂いがする

主人公の言葉が脳裏を過る。私にとっての最悪の結末がチラチラと顔を覗かせる。

「姉さんは、姉さんは生きています。死んでなんかいない！」
声を上げて最悪の結末を振り払う。

どうか、どうかと。私の全てを捧げても良い。
だからどうかと願っていると風に乗って血の匂いがした。

速度を更に上げた先に倒れ伏している人を視界に収めた。

蝶のような羽織に地に散らばる濡れ羽色の長い髪。頭の両側に
ちよこんと居座る蝶の髪飾り。

「姉さん!!」

それが姉だと認識した瞬間、心が絶望に覆われた。

それでも、姉はまだ生きています。治療すればまだ間に合うかもしれない。
いや、もう間に合わない。運命を変えることなんて最初からできな

かったのだ。

と正反対の言葉が囁くがそんなこと意識している暇なんてない。

「姉さん！」

「……しのぶ……」

姉を抱き起こして触診する。外傷はない。内部から攻撃されているんだから当然だ。

「しっかりして姉さん！今、治療するから……！」

治療すると言ったものの、今の時代では身体の内部の負傷を治療する技術はない。

どう頑張っても絶望的な状態だ。

「良いのよしのぶ…」

姉も私ほどではないにしても医療の知識は得ている。

己がもう助からないと解っているのだろう。

イヤだイヤだと頭を振る私にしnoぶともう一度名前を呼ばれる。

姉の最期の言葉なのだと解ってしまったって涙が溢れる。

「しのぶ…あなたは、鬼殺隊を辞めなさい」

ああ、同じだ。あの話と同じだとこれから姉が紡ぐ続きの言葉が分かってしまう。

「あなたは、本当に、本当に頑張っているけれど…多分しのぶは……」
言葉を切った姉は瞳を閉じて、その言葉の続きは言わない。

「しのぶには普通の女の子の幸せを手に入れてお婆さんになるまで生きてほしいのよ」

目を開いて代わりに胸の奥で望んでいた想いを紡ぐ。

それはしのぶの中にもあった想いだ。

鬼殺隊だなんて、鬼なんて全部知らないフリして家族みんなですべてに暮らしたかった。

でも、それは家族三人が揃っていないと意味がない想いなのだ。

「嫌だ。絶対辞めない!」

「姉さんの仇は必ず…必ずとる。だから言って!!どんな鬼にやられたの!?!」

叶わなくなってしまうた幸せにいつまでも縋り付いてはいけない。

ならば、せめてその幸せを壊した張本人を殺したい。これ以上ないほど殺す。

「お願いよ、カナエ姉さん!!こんなことされたら、私……普通に生きられない…」

「……………」

姉に致命傷を負わせたのは私の想像するヤツなのだろう。
それでももし、違った時のために私は姉を問い質す。

私の悲痛な叫びに姉はとうとう観念したように言葉を紡ぐ。

「頭から血を被ったような鬼だった…ニコニコと屈託なく笑う。穏やかに喋る…十二鬼月だったわ…」

やはり、上弦の貳アイツだった。

「姉さん、カナエ姉さん…ごめんなさい。でも、ありがとう」

握っていた手から力が抜ける。

細められた目は瞳孔が開き、流れていた涙が頬を伝って止まる。

「姉さんの望みを叶えられない出来ない妹で本当にごめんなさい…」

「こんな妹を大切に思ってくれて、愛してくれて…本当にありがとう」

そして、貴女を看取ったのが貴女の大切な妹胡蝶しのぶではなく、私胡蝶しのぶではない誰かであることに心からの謝罪を。

何れ死ぬ私が挫折する話

花柱 胡蝶カナエ死亡の知らせは瞬く間に知れ渡った。

葬儀は速やかに行われたにも関わらず、知らせを聞いた多くの者が参列した。

皆、多かれ少なかれ蝶屋敷で世話になった者たちだ。

患者の機能回復訓練で賑やかな蝶屋敷だが、今日はとても静かだ。喪主として弔問してきた者の対応がひと段落し、ようやく一人になれる時間ができた。

“私”が私になってから自身の望む未来にするため、最大限の努力を続けてきたつもりだった。

今にして思えば毒の件を筆頭に詰めが甘いところや楽観視していた部分が多々あった。

姉が悲しむからと手を出さなかったけど、さつさと手を出せば良かった。

毒に手を出したところで現場に居合わせなければ意味がないけど。それでも、何かしら変えることは出来たと思いたい。思いたかった。

本当に自分の弱さにイラつく。

「何が『運命だって覆せる』だよ…出来てないじゃん…」

自嘲を零しているとヒソヒソ話し声が聞こえた。

「見た？あの子、花柱様が引き取った子」

「ええ、しのぶ様は泣いていたのにあの子、平然としすぎじゃない？」

嘲笑が聞こえたかと思ったが話の内容にヒクリと口がひきつる。話されていたのは妹の悪口。

人様の葬儀にその身内の悪口を言うだなんていい度胸している。感傷に浸る暇もない行いに一言申そうと一歩踏み出そうとする。

ザリツと砂を踏む音がした。

ハツとして振り返ると奥にやっていた妹がいた。

「……しのぶ、姉さん……」

いつもの穏やかそうな笑みはなく心なしか顔が白い。

……これは聞こえていたな。もしくは他の場所で囁かれていたか。

ひそひそ声って案外、耳に付くのだ。聞こうと思っていなくても聞こえる。

「カナヲ」

ふわり。

妹の手を優しく握る。

あーあ。こんなに冷たくなっちゃって。しかも軽く震えちゃっているし。

妹は体温が低くなっているから震えているのだと思っているのだろうか。それとも、薄情さに気付かされて震えているのだと思っているのだろうか。

「カナヲ、大丈夫よ」

さらさらと通る髪を撫で優しく抱きつく。

ああ、でもあの調子だと気づいていないかもしれない。

「カナヲが、カナエ姉さんの死を悲しく思っているのはちゃんと、解っているから」

背中に回した手でぽんぽんと軽く叩く。

「だから、気にしなくていいの。そう思ってくれただけで十分よ」

何も言わない妹に勝手な妄想を押し付けているのかもしれない。本当は違うことを言いたかったのかもしれない。

それでも、妹が姉のことを悲しく思っていると感じた気がした。

そして、どうなるか容易に想像がついたのに何もフォローしていなかった自分に相当参っていたようだと言った。

姉失格だ。

もう、姉はいないのに。この子の姉は私だけになってしまったの

に。

姉である私がいっつきりしないと、妹が不安がってしまうのに。

「……いっつきりしないとね」

「……？」

不思議そうに小首を傾げる妹になんでもないと言うと袖をちよこんと握った。

「……今日は一緒に寝ましょうか」

もうそんなことする年齢でもないのに無性に誰かと共に夜を過ごしたかった。



姉とお揃いの蝶の髪飾りが目に入る。

この髪飾りを貰った時、私はまだ何も知らなかった。

姉に憧れて早く大人になりたいくて、背伸びした髪型にしたんだっけ

…

でも、もう憧れて共に並びたいと思っていた人はいない。

…未練たらたらなのがとてもよくわかる。

いつまでも姉のことを引き摺るわけにはいかないのに。

視界に鏡が映る。

そろりと手を伸ばす。

「あら、起きた？おはよう、カナヲ」

朝の支度を終えてカナヲを起こしに行ったら妹はもう起きていた。
「……かみ」

妹はこちらを不思議そうに見上げると珍しくポツリと一言漏らした。

「え？ああ、よく気づいたわね」

一瞬、何を指したのか分からなかったが私のシルエットに違和感を抱いたらしい。

「思いきって切っちゃった」

どう、似合う？と小首を傾げてみる。

開けた襖から入ってきたそよ風が髪を撫ぜる。

そよ風と共に首筋を撫でる髪がくすぐったくてしばらくは慣れないなあと思った。

何れ死ぬ私が藤の花に埋もれる話

胡蝶しのぶの代名詞藤の花の毒を本格的に作ろうと思う。

事前研究もある程度済んだし、要領は解ってきた。ということ、早速取り掛かるがここで一つ問題。

前にもちよろつと言ったけど、彼女がどんな配合で毒を作っていたのか知らない。

ある程度解ってきたと言ってもそう簡単には作れない。彼女の知識を最大限駆使しながら一から作るしかないのだ。

最初から成功することは絶対ない。たくさん失敗して、それを改良してようやく成功作ができる。

つまり、何が言いたいのかというと。

効果があるか確認するための検体鬼が欲しい。あと、毒藤の花の材料もたくさん。

最初は任務と自前でいいだろう。でも、ある程度の確認ができた後はそうにもいかない。

細かい調整を任務のついでにやるのはちよつと無理があるし、そのために必要な材料だつて増える。

私個人でやるのには限界がある。

なので、個人でやるのはスツパリと諦めてプレゼンすることにした。

知識を最大限駆使して藤の花の毒の有用性とか、推論とかを書き上げてそれを最低限証明するために自前で用意した藤の花の毒プロトタイプを作つて試してみた。

結果はまあまあ成功？最低限、証明はできたと思うのでその結果も添えて鎧鴉に託しましょう。

行き先は困った時の元締め、お館様。

彼人なら絶対食いつくと判断した。

それに毒を作るのに必要なものを二つとも用意ができる人物なのだ。

いずれ大量生産するのだから、さつさと上に伝えて最大限のバックアップをしてもらった方が効率が良い。

私の睨んだ通り、鏖鴉に送ってもらったレポートにお館様は大層食いついたようで何が欲しいとすぐに尋ねてきた。

いやいや、そちらだって解っている癖に。悪い人ですね。

「藤襲山です。そこに放り込んだ鬼と狂い咲いている藤の花を支障のない範囲で」

返事は是。

許可も貰えたので入隊試験と被らない期間で山に入り浸る。

毒の有用性も解ってもらえたようだし、任務もほとんど免除状態。さつさと毒を作れてことですね。わかります。



「今晚は。ちよつといいですか?」

疑問符をつけているけど拒否権はない。

山に踏み入ってすぐに見つけた鬼を痛めつけて動けなくなったところで実験開始。

お注射打ちますねー。大丈夫ですよーちよーとチクつとするだけですからー

藤襲山の鬼は入隊試験の篩に掛けるためにいる存在なのでそこまです強くはない。

捕らえるのも簡単だし、ちよつと移動すれば他にもたくさんいるか

ら検証するのに便利なのだ。

たまーに生き残って強い奴がいるらしいが、報告が上がり次第すぐに討伐される。

その報もすり抜けるやつもいるが。

そう、鱗滝さん大好き(○)な手鬼さんのことだ。

私も発見すれば討伐するように努力しているんだけどなかなか見つからない。

見つけたとしても、私の実力じゃあちよつと難しいかもしれない。

だって手鬼くんの頸、とつても固いのでしょうか？

柱腕相撲ランキング安定の最下位である胡蝶しのぶに、普通の鬼の頸を切るのに苦戦している私に切れると思うか？

寧ろここで藤の花の毒の出番でしょ。

まあ、見つけたらちよつと交戦して無理そうだったら撤退。素直に管理者であるお館様に報告して討伐隊派遣してもらおう。

藤の花は山の間引きしたものを主にもらっている。

まさかお山の藤の花、間引きしているとは思っていなかったわー。

あの量だし、てつきり放置しているものだど…しかもすごい量。

いっぱい作り放題だね!!

ちよつと調整しては藤襲山に試しに行く。その結果を反映させてまた試しに行く。

蝶屋敷と藤襲山の往復を繰り返す日々。

任務はないが蝶屋敷での仕事もあるし、鍛錬を怠るわけにはいかない。

うん、オーバーワーク再びだね。あの時ほどではないけど。

試行錯誤すること何千回。

ようやくと出来ましたよ。藤の花の毒。

お館様もお気に召す成果を挙げられたので他の面々にも実用化するらしい。

ただ、この毒は鬼だけでもなく人間にも有害なので取り扱いがしっかり出来る人のみの運用らしい。

例えば、毒の取り扱いに長けている人^忍とか。

大々的に使えば毒の対策されるかもよ？とそれとなく伝えておいたので毒の取り扱いに長ける人を作るといふこともないと思う。

私？製作者なのだから、普通に使うよ？頸切れなくて困っていたから作った面もあるし。

完成した毒を早速大量生産して出荷、出荷。

いっぱい作るのには苦労したけど労いとしてお館様から長めの休暇をするようにお達しをもらったのでしばらくはゆっくりと過ごさうと思う。

流石に私一人で全ての毒を作るのは負担が多すぎるので他に調合する人も作らないといけないけどそこまで人数を増やすつもりはない。せいぜい一人か二人かな？

他の人物がどのようにこの毒を使うのかはお館様にお任せだけど製造ラインだけは完全に任すつもりもない。

私を使う分を確保するのは大前提。だってこの毒の製作者なんだからもん。

これくらいの我儘は通しても問題ないよね？製作者特権です。



藤の花の毒が入った小瓶を前に私は思う。

この毒をどうするべきか。

毒使いになるのは最初から決めていた。そうしないと私はこの世界では生き残れない。

それほど私には剣士としての才能がない。

胡蝶しのぶは姉上弦の式の仇を殺すために毒を使い始めた。

鬼の頸を切れないからという理由もあるかもしれないが彼女にとってはそれが至上目的だった。

私もそうだ。

鬼殺の剣士としてこの世界で生き残るため、あ上弦のサイコパスの式を殺すために藤の花の毒を作って毒使いになる。

毒使いになった私がどうすればあ上弦のサイコパスの式を確実に殺せるのか。

胡蝶しのぶは毒使いになっても姉上弦の式の仇を殺せなかった。

命を削って頑張っても上から目線で煽られて自身の手で殺すことはできなかった。

それでも今更、あ上弦のサイコパスの式を殺さないという選択肢はなかった。

大切な家族である姉を殺された者として。

『鬼滅の刃』という話の先を知っている者としても。

学んだだろう、私。

楽観的希望は抱くなど。

あの男を殺すのに手段を選んでいる場合ではないのだ。
胡蝶しのぶも言っていただろう。

——— 倒すと決めたら倒しなさい

ならば、手段を選ぶべきではない。

——— そう、例えば何を犠牲にしても

脳裏に姉と妹の姿が思い浮かぶ。

姉は怒るだろう。

妹は悲しむだろう。

そう思いながらも私は――。

躊躇いはもう存在しなかった。

――そうして私は藤の花に埋もれた。

何れ死ぬ私が『悪鬼滅殺』を刻む話

「だ、たすげでええ…！」

「…そう言って何人喰ってきたんだか」

ヒュンと刀についた血を払いながらつい先ほど刺したばかりの鬼を見る。

鬼は不自然に血管を浮かばせ、苦しそうにのたうち回る。

藤の花の毒だ。

「あなたたちが悪いのよ。人を喰おうだなんて思わなければこんなことにならなかったのに…」

ああ、でももう聞こえていないか。

毒に全身侵されているもの。もう死んでる。

「うーん…調整は完璧なんだけど、戦いながら調合するのがなあ…要練習かなー」

お早うございます、今晚は。

鬼に効く毒を作ったちよーとすごい人です。

今、私は久しぶりの任務に励んでいます。

相棒はよくお使いに出す鏝鴉とこの間新調したばかりの日輪刀です。

そう、新調したのだ。

新調内容はご存知の通り、藤の花の毒を調合できるからくり仕掛け。

まさか今度はからくり仕掛けにするとは思っていなかったらしく、里長がちよつと頭を悩ませていた。

毎度毎度、変な注文してすみませんねー。でも、出来るって解っているからついついしちゃう。

おかげでお館様からもらった休暇期間のほとんどを鍛冶の里で過ごした。

違う、そうじゃない。ていう言葉が聞こえた気がしたけど気にしない。

私の住まいは蝶屋敷。

休暇をもらったとしても住まいに急患がやってくるんだから対応するのが当然。

それに比べるとあそこは急患もないし、機能回復訓練を受ける者がいないので私の手持ち無沙汰度が高い。

何せ刀出来上がるまで待つて試し振り↓違和感持ったところを報告↓更なる改良をしてもらう。という待ちの姿勢。ちなみにその間は、里内を自由に過ごす。

あれ？あつちにいた方が休暇になってない??

鍛錬は怠らなかつたし、かと言ってそれだけだと時間が大量に余るので医学書とか持ち込んで読み込んでいたけど…

…：うん、とても有意義な休暇だったね!!

色々あつたけどこれで胡蝶しのぶ装備が出来上がった。

あとは調合するのに慣れればイイ感じ、だ。

毒も作つたし、刀も新調したし…あとは鬼を切っていけばその内、お声がかかるだろう。

なんの声って？そりゃあ、柱ですよ。

え？階級のこと全く気にしてなかつたらって？

まあ、その時はね??

被検体を含めると結構な量殺しているが、それは藤襲山にいた鬼なので数に含まれていないだろう。

毒を使う前に切つた鬼の数はそこそこだつたし、これから練習ついでに殺していけば柱の就任条件である鬼50体討伐は達成されるだろう。

あとは階級だが、毒を作つた報酬の代わりなのかいつの間にか階級が結構上がっていたのでこちらもその内満たすだろう。

柱は姉が死んでからすぐに新しい者が埋まったけど、鬼が蔓延っている人の命が軽い世の中なのでコロコロと変わる。

お館様が一年間、顔触れが変わっていなくて嬉しいって言ってた気持ちかがわかった。

◆◆

鬼の頸を切れない私が柱に相応しいかと問われれば、相応しくないと答えるだろう。

柱とは文字通り鬼殺隊を支える存在だ。

鬼を殺せる毒を作った人間とは言え、頸を切れない柱に疑問を抱く人が出てくるかもしれない。

でも、私は柱になる。

柱になれば十二鬼月と出会う確率が上がるし、使える権限が広がる。

そっちの方があのサイコパス上弦の式を殺すために都合が良いのだ。

それにアイツを殺すために無限城に赴かなければならないのでどっちにしろ柱にならないといけない。

という事で今日も元気に毒をぶす刺していきますよー。

今の私が鬼絶対殺すマンに見えているのが分かるが心情的にはそうだし、鬼殺隊に所属する人間の半数ぐらいいは大なり小なり鬼に恨みを持つ人間だから気にしない、気にしない。

あ、彌豆子ちゃんと珠世さんは例外な。

彌豆子ちゃんは天使だし、珠世さんは鬼側から人間に治そうと努力してるもんね。

応援こそすれ排除する理由が見当たらない。

珠世さんと会えないかなーと思ってるが、鬼絶対殺すマンの前に珠世さんが出てくるはずもなく…。

本当にお館様ってどこで珠世さんと出会ったんだろう？

お館様も珠世さんも鬼舞辻無惨に狙われているからテリトリーから頻繁に出るわけにも行かないし…本当に謎。

そんな事を思っていると鏖鴉が伝言を携えてやって来た。

勿論、待ちに待った柱就任についての話だ。
いやー、案外早かったですねー。

もともと胡蝶しのぶも毒の功績が大きかったから柱になったのは分かっていただけど毒が完成した時点でなんの音沙汰もなかった。

最初は戸惑ったよ。増産よろしく。あ、階級も上げとくね！とされてそれだけ？って思っちゃたよ。

もしかして足りなかった？と思ったからしばらく毒殺行脚していったけど。

柱就任を正式に発表するのは柱合会議の場でらしく、私はお館様のお屋敷に招かれた。

勿論、柱になるので場所はしっかり教えてもらった。

まあ、感想としてはへーこんな場所にあるんだーくらいだけど。

あとは行くのに仲介を必要としないので行きやすいなー程度？

そもそも一般隊士がお招きされることなんてそうそう無いので知らなくても困ることはないけど。

紹介されるまで裏で待機なので暇を持て余した私は周りを観察する。

旧家と言われただけあつて屋敷広い。

広すぎね？

蝶屋敷よりも広すぎて患者何人収容出来るかな？と無駄な思考するレベルでデカイ。

え？ここに産屋敷親子と女中が住んでるだけ？

すつごく持て余してそう。絶対誰も使っていない部屋いっぱいあるよ。

蝶屋敷簡易出張所作ってもまだ余裕あるだろコレ。

あ、ご息女たちも見えたよ。

流石、五つ子。顔が似すぎて髪飾りがないと区別がつかない。そこに違和感なく溶け込んでいるご子息もご子息だったわ。

息をするかの如く女子の中に溶け込んでいた。

時代が大正ではなかったら大人になっても女装しているだろうな

アレ。絶対似合う。

おっと、会議が始まりそうだ。観察もここまでか。

「また君たちに会えたことを嬉しく思うよ。今日は新しく柱になる者を紹介したいと思う」

鬼の頸を切れない私はきつと柱に相応しくない。

本人である私でさえそう思っているのだ。気に食わない者も星の数ほどいるだろう。

それでも、私は――

「皆様、初めまして。

この度、柱の末席に加わる事と相成りました。蟲柱、胡蝶しのぶと申します。

若輩者故、ご迷惑をお掛けすることが多々あると思いますがどうぞ宜しくお願い致しますね？」

十二鬼月を、上弦童磨の弑を殺す為に柱と成るのだ。

何れ死ぬ私が同士に出会った話：壺

「うむ、炎柱、煉獄杏寿郎だ！」

相変わらず、暑苦しい人だ。褒め言葉だよ？

槇寿郎さんが何時絶望して柱をやめたのか知らないのでワンチャンのぶさんと一緒に柱にいた時期があったのではと思ったがそんなことなかった。

もうすでお代わりになっていた。

炎柱 煉獄杏寿郎。

この人、戦隊なら熱血ヒーロー主人公ポジション。熱き正義がうんたらかんたら。

正直言って、初見で見たとき主人公とポジション一緒じゃね？と思った。即斬首案を聞いてそんなことはなかったと思っただが。

でも、この人一番最初に死ぬのである。

第一印象と同じく、熱血漢で正義漢。責任感がとても強いが後腐れはしないというさっぱり風味。

懐も深いためみんなの兄貴っていう感じの人だ。容姿の遺伝とか、語気とか主張が激しいけど…。

濃ゆいかまぼこ隊を俺の継子にしてやろうって懐と面倒見が良すぎませんか…？

だがしかし、柱の中で一番最初に死ぬ人物である。

お前…お前…！普通、最後まで生きるだろ…！最後まで生き抜いて主人公を支えろよと思ってしまうが、主人公たちを守って死んでしまうのである。

四天王最弱もとい、柱の中で最弱である私を差し置いて。

私が先にやられるのがテンプレだと思っんですけど？ホント、何でだよ。

この世は地獄です…。



「む。胡蝶、そんな量では倒れるぞ。俺のを分けてやろう」

「いえ、これが私の通常の量ですのでお気になさらず」

煉獄さんと食事を一緒にする機会があつたので行ったら食の細さを心配された。

貴方と比べたらどんな人でもそんなものですよ。

近いうちに貴方より食欲旺盛どこの十倍娘な人と出会いますけど。

話がずれた。

この人、戦闘能力がどつかの鍛錬魔が褒め立てたように高い上に指揮能力もズバ抜けて高いのである。

クセの強すぎる柱たちの中でこの指揮能力も兼ね備えている人はすっごい希少。

考えても見てみなよ。

生活に支障が出るレベルのコミュ障な富岡さん、足手まといは要らない派の不死川さん、他人に一切興味がない時透くん。

あれ？1／3くらい指揮能力なさそう…。

不死川さんは知性があるからやらなきゃいけないならやりそうだけど、蜜璃ちゃんかね。

炭次郎タイプもとい、感覚派だからね…

うん、惜しい。

どこかの上弦の参のように惜しい。

あの人がいるだけで無限城の決戦とかだいぶ楽になると思うんだ。

確かご子息が指揮を執っていたはずだけど、現場でも指揮出来る人もいた方が良くと思うし。

無限列車編で死んでしまった原因は守る対象が多すぎたのと上弦の参が襲来してきたからなんだよね。

もう一人、守れる人がいればきつと死なずに撤退に追い込めたはず
：

その『もう一人』に私という選択肢はない。

私には守るといふ戦いが出来ない。攻撃力もないし、戦い方そのものが向いていない。

あの場で出来るのは治療だけでむしろ守る対象を増やすことになる。

あそこに自然に来て尚且つ、守るといふことも出来る人。

やはり：蜜璃ちゃんだな。

あの子は煉獄さんの元継子だったし、列車には美味いと12回連呼するほど美味しいお弁当がある。

時期が来たら蜜璃ちゃんに煉獄さんが呼んでいたとウソをつこう。

ーーー列車の怪事件を調べるのだけど、そこには美味しい弁当も売っていると聞いたから一緒にどうだーーと。

もし、ウソが発覚しても師弟の時間をサプライズで作ったと言え
ばいい。

納得はしなくても結果オーライだからそこで有耶無耶にしてしま
えばいい。

本当は言えたらいいんだけどね。

小娘の戯言を聞く人はいないだろう。聞いても頭がおかしくなっ
たと思われ、医者に連れていかれる。

そうやってはいけないのだ。

とてつもなくずるいという自覚がある。

彼の誇り高き正義の精神に反するかもしれない。

だが今、私がドロップアウトするわけにはいかないのだ。

何れ死ぬ私が何時かの柱を育てる話

柱に就任してからそれなりに忙しい日々を過ごしている。

と言ってみるものの、柱としての仕事が増えただけだ。

姉の継子として任務に同行していたので、ある程度の要領は分かっている。

なので、私的に柱になって新しく加わった大きな項目は『継子の育成』だ。

継子を誰にするかはその者を育てる柱に一任しているらしく、この子に決めたカンが育てと囁いており、本人にその意思があればそれでいいみたい。

私は他の柱と比べて一般隊士と出会う確率が高い。

そして、運が良ければ機能回復訓練などにも参加しているので一番会いやすい柱だと自負している。

そのおかげか柱の地位を望むものがよく訪ねてくる。

だが、私は柱の中で最弱と言っても過言ではない。

毒でもなんでも使ってもいいならもう少し上がると思うが、純粋な戦闘能力を求めるのなら他を当たってくださいだ。

そんな私だからか、選ぶ継子は大抵、スピードに特化していてどんな手段も厭わない人物だ。

最初は純粹に私と同じようなスピード特化型に目をつけて稽古をつけていたんだけどね？

何故か手段を厭わなくなってしまうって…どうしてそうなったんだと内心、すごく思っています。

何が悪いんだろうね??

ただ私は、私より体格が大きい継子たちが嫌がりそんなことをして

いただけなのに：

小柄で腕力が足りないからそれを補う工夫を：ちよつと人より多く仕込みをしているよつて喋っただけなのに：

本当になんでだろうね??

あれ？なんか違う方向に走っているな〜と思いつながらも継子たちを任務に出していく。

この時の思考は、生きて帰ればそれでオールオツケー！あわよくば鬼も殺せたらいいね!!張り切って頑張ろー!だ。

被害が出ないことが一番だけど、多少の被害は目を瞑るしかない。これは必要な犠牲なのだ。必要な犠牲なんだ：！

でも、何でだろうね：私の手元に使われなくなった鏢たちがある。多少の被害は必要な犠牲なので目を瞑るしかない。

そう、その必要な犠牲のためなら私は何枚でも始末書だつて書けるし、握り潰すためのお金だつて引きずり出してみせる。

鬼に家族を殺された人私たちがのような存在を増やさないために私は鬼殺隊に入ったし、そのため剣を振るっている。

だからと言って、鬼殺隊犠牲者の戦死者を増やすつもりは毛頭ない。継子にはその所しつかり教え込んでいたはずだ。

最悪、鬼は殺せなくてもいい。絶対に生きて帰ることを諦めてはいけないと。

人の命が儂いご時世だと理解して、絶対なんてこと有り得ないと内心、思っているながらも何だかんだ可愛い愛弟子だったのだ。

守りたいと、生き残つて生き抜いて欲しいと願っていたからこそその教えだった。

それなのに最後に帰ってくるのは物言わぬ無残な骸か申し訳程度に回収された日輪刀だ。

一人増えたのにまた一人減り、また増やしても減り、そんなことが続いていくと次第に増やすことがなくなり、それによつて減ることし

か出来なくなつた。

最後に残つたのは、周りから臆病者と言われていた子だ。その子も無言の帰還となつた。

「結局、同じ」

胡蝶しのぶには複数の継子がいたと記憶している。

そのほとんどが死に残っているのは彼女の妹である栗花落カナヲくらいだ。

どうにか生き残る継子がいなかったと模索したがそんなこともなく。今になつて思えば柱になつてちよつとはしやぎすぎていたのだ。私の力不足を補えるような人物がいるのではないか、そんな人物を育てることができないのではないかと。

あの子以外に柱になれるような人物が、私が知っている未来を覆せるような人物がいるのではないかと。

ただの自分勝手な願望だつた。酷く身勝手なエゴだ。

そんな人物が都合良く見つかるのなら当の昔に見つかつている。



「あの…しのぶ姉さん…」

「なあに？カナヲ」

最近の妹は少しマシになつてきて姉妹らしい会話ができるようになってきた。

このまま、感情を表に出すことができるようになればいいと常々思う私です。

まだコインが手放せないので時間はかかりそうだが。

今日の妹は何か緊張しているように感じる。

「私…しのぶ姉さんと一緒に鍛錬がしたい、です…」

何を話したいんだろうと妹の思いを汲み取ろうとしていたら横から衝撃が殴り掛かつてきた。

「……姉さんたちのように、鬼殺隊に入りたいです…」

原作で言うのなら身体中汗をかくばかり、だろうか。きつと、妹にとつては重大な決心だっただろう。

「……………そう」

私はそう返すことしかできなかった。

栗花落カナヲが胡蝶しのぶより剣の才能があることは解っていた。弱っていて二人がかりとはいえ、十二鬼月を倒したのだ。いずれ柱になるだろうと思っていた。

それでも、私は彼女を鍛えることはしなかった。

妹が何も言わないことを良いことに医学と最低限の護身術しか教えなかった。

だけど、感情がまだ表に出ない妹が自分から鬼殺隊に入りたいのだと言った。

誰かにその選択肢を提示されたのか、自分からそう思ったのかは分からない。

だけれども、妹が自分の口からそう言ったのだ。

反対することはできた。

だが、反対をすれば彼女が自分から意見することがなくなってしまうのではないかと危惧した。

「カナヲが言いたいことは分かった。貴女を鍛えるわ。この世界を生きて生き抜けるように」

厳しくいくわよ？と確認を取るものの、妹はきつとやめることはない。

「はい、師範……」

妹のことを甘く見ていた。

流石、何時か柱になる者だ。私が苦勞してやってきたことを軽々とやってのける。

妹だといえど、いや、妹だからこそ、その才能に嫉妬する。

その才能が一欠片でもあれば私は……

……………醜い嫉妬だ。家族といえども血が繋がっていない妹にそう

思うのはお門違いだ。

そういえば一時期、姉にもそう思っていた時期もあった。私はなかなか業が深いようだ。

胡蝶しのぶが栗花落カナヲを何時から鍛えていたのかは知らないがこの分だと彼らと同期になりそうな予感。

内心、複雑だが彼が妹に良い影響を与えると知っているので見送ると言う選択肢はない。

まあ、それまでは見送り続けますけどね!!

妹には余裕で最終選別を通ってもらわねば。

臨床実験の時に見当たらなかったので手鬼がまだいるのかいないのか分からないがそんな存在がいる藤襲山に七日間居るのだ。

対策は万全にすべきである。

え? 過保護?? いやいや胡蝶しのぶだってそうしてたから。それに可愛い家族ですもの。それくらい当然でしょ。

何れ死ぬ私が同士に出会った話：弐

「今日から、霞柱となる時透無一郎だ。少々、ぼんやりとしているが責任感が強い子だよ」

みんな支えてやってくれと告げるお館様。

時透くんはぼうつと私たちを見ている。

：多分、私たちを見ているようで空を見ているんだろうな。

ついにやってきた時透くん。

彼がやってきたということは竈門家の惨劇が終わり、主人公が鱗滝さんの所で滅茶苦茶修行している時期だ。：だったはずだ。

全く持つてそんな話、聞いてないんだけどね。

義勇さんはハウレンソウをちゃんとした方がいいと思う。

主人公を助けようとした私が言うことではないけど。

彼を見ると、時透推しの知り合いの事が思い浮かぶ。

私がこの世界に来て結構な時間が経つが、彼女は生きているのだろうか。

もちろん、メンタル的な意味で。

柱の踊ってみたなどを画策していた彼女と談笑していたことを昨日のように思い出す。

「：もしやるなら男振りソロパートを煉獄さんに踊らせたかったですよね」

「柱で唯一お亡くなりになっていますもんね：：なんで死んじゃったの：：」

「あとはぎよーめーさん？に大旗を振らせたんです」

「やめてください。その姿が思い浮かぶじゃないですか：：！」

あ、悲鳴嶋さんに旗振らせなくなってきた。考えるのやめよう。

「こんな奴が柱になって大丈夫なのか？」

お館様が去った後、音柱である宇髄さんが当然の疑問を口にした。

柱は隊の支えであり、責任がある立場だからぼんやりとしている子でも大丈夫だろうか？

それなら生活に支障が出るレベルのコミュ障な義勇さんだって柱をやっていているのだから心配ないと私は思う。

「時透無一郎くん、私は蟲柱の胡蝶しのぶです。よろしくお願いしますね」

「……………」

ヒクリと口が引きつる。

大丈夫だ、私。落ち着け、私。

無視されたわけではないから。多分ぼうつとして聞いてなかっただけだから。あと、時透くんは効率厨だから。

自分に言い聞かせていると遠目で時透くんの鎧鴉がザマアミロと言いたげな様子を見てしまった。

……………鴉つて唐揚げにしたら美味しいのかしら？

ハッ！いけないいけない。思考が変な方向に向かってしまった。

あの鎧鴉は時透くんのモンペだから仕方ない。悪意100%だけど仕方ない、そういう存在なんだ。相手にしたら負け。

思考を戻そう。

彼は最年少な柱で、お館様命な子だ。あと効率厨。

最年少の柱つてすごいよね。才能に満ち溢れているよね、ちよつと辛辣だけど。

これだけ見ると生き残りそうな予感がするがここは味方側がぼこぼこお亡くなりになる世界。

彼も死ぬのである。

無限城の決戦で死ぬのである。

確か…上弦の壺がおじいちゃん…？だったらしく…

孫に会えて嬉しいぞーとハッスルしたおじいちゃんにやられ、存在したらしいお兄さんの元に逝つたらしい。

正直言つて設定でんこ盛りである。

そんな因縁対決聞いてない。主人公級じゃん。なに？カカシ先生ポジなのこの子??

時透推しではないが最年少には生き残つて欲しいとは思っているんだけど、どうすれば良いのか分からない。

無限城で上弦の壱に会わないように頑張つてとしか言いようがない。それもおじいちゃんの嗅覚で見つかりそうだから無理そうだけど。

ときとーくん頑張つてー。超頑張つてー。



「ねえ、鬼の頸を切れないほど弱いのになんで柱をやっているの？」

ある日、たまたま会つた時透くん不思議そう聞かれた。

「そうね…多分、鬼に効く毒を作つたからだと思うけど…私もなんで柱になれたのか不思議に思っているわ」

それは私も常々思っていたことだ。

原作がそう柱だだつたたのだから柱そうなるなるのだろうとは思っていたが何故と聞かれると何も言えない。

胡蝶しのぶがお館様に上弦の弐に特攻かけることを話していたのは知っている。

それで何か言われて怒っていた描写があつたのは見たことがあるから。

多分、それを聞いたからお館様は胡蝶しのぶを柱にした。

だけど、私がお館様に何も喋っていない。上弦の弐を殺すために柱になつたことも、自分がどんな存在であることも。

何を考えているのか、何を知っているのか知らないけどお館様は私を柱にした。

十二鬼月と当たればすぐに死ぬであろう私を。

「でも、お館様が私を柱に任じた。ならばそれが答えよ」

だが、お館様が私を柱に任じたという事実があればそれで十分だ。その事実さえあれば私の目的が果たせる。

彼の疑問にはちゃんと答えていけないけれど、これで勘弁して欲しい。

時透くんはきつと柱の実力でもないのになんで柱になることを断らなかつたのだらうと思うけど、お上が決めただからそうなんだよとしか言えない。

上司の命令を断れる部下がいますか？

…時透くんならはいと答えそう…

これ以上はやめておいたほうがいいな。やぶ蛇になりそう。

「だからこれ以上、気にする必要はないわ。」

どんな人物が柱になろうともいつかはいなくなるのだから」

柱に相応しい人物だらうと、柱に相応しくない人物だらうと関係ない。

柱であつた胡蝶カナエも、煉獄杏寿郎も、胡蝶しのぶも、時透無一郎も—————

「それが、人より早いか遅いか。ただそれだけ」

—————みんなみんな、死んでしまうのだから。

何れ死ぬ私が世界の中心と出会った話

柱が私の知っている人となり、妹が最終選抜を突破し、鬼殺隊となった。

妹に最終選抜の様子を聞くと彼が居たようだ。

彼がそこに居たということは原作は恙無く進んでいるようだ。

だが、富岡さんはいつも通りだ。

いつも通り、鬼を斬る。

人を喰わず、兄を庇った鬼になってしまった妹の話は一切しない。

まあ、富岡さんはそういう人だからしょうがないと内心、ため息を吐く。

ちゃんとホウレンソウをしてくれば、こちらとしても予め対応できるし、柱合裁判あんなことにならずに済んだのに。

それが富岡さんが富岡さんである所以なので仕方がない。(2回目)

「義勇」

「つのだ」

お館様に呼ばれた。那田蜘蛛山に関する報告は終わったようだ。

「御意」

さて、お仕事の時間だ。

◆◆

私は森の中を駆けた。

私のやるべきことを片付けて、いよいよ最後の役目を務めなくては。は。

それ即ち、感動の兄弟弟子の再会を邪魔することだ。

胡蝶しのぶは鬼を前にうっかり刀を抜かない富岡さんが危ないと

判断して助太刀をしようと思ふと彌豆子ちゃんに刀を振り抜いた。

しょうがないね、しのぶさんの中では義勇さんは天然ドジっ子だからね。

ちなみに私は富岡さんのことを幼女だと思っている。

私は彌豆子ちゃんが人を襲わないことなどいろいろ解っているから傷つけるつもりは一ミリもないがそういうわけにはいかないのが悲しいところ。

だって私、鬼絶対殺すマンだと認識されているんですもの。

鬼絶対殺すマンが鬼に対して何もしないどころか保護しようとし出すとか頭、大丈夫?となる。

私の中では彌豆子ちゃんと珠世さんは別枠になっているが他の者から見れば同じ鬼枠。

心が痛むがやらなくては話が進まないのだ。

でも、やっぱり申し訳ないので毒はナシの方向で。

駆けている先に義勇さんの姿が見えた。

大丈夫、富岡さんならちゃんと防いでくれる。防いでくれる。

私がいつも鬼にしているように刀を振り抜くと富岡さんはちゃんと防いでくれた。

くるくると回転して富岡さんと向き合う。

「あら、どうして鬼を庇うんですか?」

「いきなり邪魔をするなんて…そんなだからみんなに嫌われてるんですよ」

いや、分かるよ?富岡さん。彌豆子ちゃんは特別だもんね。私も特別枠に入れているよ。

でもね、富岡さん。そういう報告はちゃんとしてくれないと対峙するしかないじゃないですか。

後、胡蝶しのぶとなったからにはこのセリフは言わなければならぬという使命に駆られた。

反省もしていなければ後悔もしていない。

「俺は、嫌われていない」

「そうですね。やはり自覚なかったんですね」

心外だというような反応を返されたがこちらの身にもなってほしい。
い。

何度、富岡さん幼女だから仕方がない（）と流したのだと思っている。

これを機にもう少し成長してほしい。無理だと思うけど。

「坊やが庇っているのは鬼よ。死にたくなかったら離れなさい」

21歳児をイジるのもそこそこに本筋に戻ろう。

彼に警告するが、彼は自分の妹だと正直に告げる。

今まで出会った鬼殺隊士は最後まで話を聞いてくれる優しい人だったのだろう。

だけど胡蝶鬼に恨みを持つ者しのぶは最後まで話を聞いてあげないし、訳を知ったから剣を納めはしないのだ。

「そう。じゃあ、苦しまないようにすぐに殺してあげる」

刀を構えるが最初に言ったように殺す気は微塵もない。だって禰豆子ちゃんだし。

私にはそれで通じるがこの後は、お館様が認めない限りそれでは通じないのだ。

頑張れ主人公。キミだったらこれ乗り越えれると信じている。

そもそも乗り越えれると分かっているからやっている節があるし、できるよね？

キミのことちゃんと期待しているよ。

だからこそ、原作のように振舞っているんだから。

「本気なんですネ。柱なのに鬼を庇うだなんて」

軽く刀を結び合わせるけど富岡さんも本気で斬ろうだなんて思っているはずもなく膠着状態。

だけど柱としてやるべきことはしっかりとやらないといけないので。

相手が主人公だろうが、この世界の核だろうが、後でお許しが出るだろうがやらなくてはならないのだ。

ということ、鬼ごっこしましょうねー。

木々を飛び乗って逃げた彼を追いかける。

富岡さんも半歩遅れて私を追いかけるが捕まらない自信がある。

ウソ。ほんとはないけど、胡蝶しのぶと比べると簡単に捕まる気はない。

さて、妹には追いかけるよう指示をしたし、どこまで持つかちよつと楽しみだなー。

山に罫はお約束だよねと簡易的な罫を仕掛けようと懐に手を伸ばす。

スカッ

そこにあるはずのものがなく、手が空を切る。

あ：仕込み直すの忘れてた：

いろいろあってすっかり忘れていたことを今になって思い出すという大失態。

自分がまさかの『うっかり』をしてしまって呆然とした隙にあっけなく富岡さんに捕まってしまった。

何れ死ぬ私が傍聴する話

お館様の指示により、竈門兄妹とともに屋敷に向かう。

「……………」

「……………」

これから柱合会議…その前に柱合裁判か。

メンドくさなあ…でも、ボイコットは流石にできないしなあ…

那田蜘蛛山に行つてこいと言われた時から覚悟はしているがやはり気が重い。

「これが柱の宿命なんだ」とか「あの場の進行役がいなければカオスになるぞ」とか言い聞かせて行く気を何とか起こす。

…富岡さん、よく柱合会議行こうと思えるよね。私だったら行かない。(褒め言葉)

◆◆

「うむ！これより裁判を始める!!成る程！」

「裁判を始める前に貴方が何をしたのか理解」

「その必要はないだろう!!」

あくお客様困ります〜困ります〜

今、私がいちんと分かりやすい説明しようとしているのに遮んなや。聞けよ。

いくら結果が分かりきつていても一刻を争う状況じゃなければちゃんと形式に則りましょうね〜。あとで色々言われても知らないゾ☆

これだから最初の頃の煉獄さんは苦手なんだよ…

思わずつきそうになるため息を頑張つて呑み込む。

「…はしら…」

ほら〜主人公が困つてんじゃん。

それも含めて説明しようとしたのにバツサリ切り捨てたばかりにえ、柱？何ソレつてなつてんじゃん。

「何とか言ったらどうだ？・富岡」

軽い現実逃避をしていたら話は進んでいたようで伊黒さん、ネチネチと富岡さんに小言を言っている。

その小言に「何とか」と言わないかハラハラしているのは私だけなんだろうなあと遠い目をする。

「別によろしいのでは？・後でいくらでもできますし」

実際、柱である富岡さんは柱合会議にだって出席するし、一般隊士である彼と比べても優先順位は低い。

ぼつちな富岡さんなんて放っておいてさつさと事情聴取（既に知っているけど）をしまえ。話が進まん。

なんとか事情聴取に持ってこれた。事情聴取というよりかは入隊経緯だね。

今まで会った人はそれで納得したかもしれないけど、柱の人たち、全然同情しないし、納得しないけどね。

話は聞くが納得してしようがないなどとは言っていないってね。さつさと殺しちまおうぜくな雰囲気は漂う中、蜜璃ちゃんが控え目に手をあげる。

「あの～でも、疑問があるんですけど…お館様がこの事を把握していないとは思えないです…」

勝手に処分してしまっているんでしょかと言う蜜璃ちゃんにそうだ！そうだ！ちったあ待つこともできねーのかよと内心、イキる。表に出すなんて出来ないので内心だ。

「鬼殺隊として人を守る為に戦えるんです！」

彼はうくん、どうしようかって雰囲気を出す一同に向かって妹は、彌豆子は人を守るんだと叫ぶ。

きつと、これが胡蝶しのぶの心に響いたのだろう。

姉の理想を叶えそうな人物に出会えたのだと、この人物ならきつと姉の望んでいた理想を実現できるとだろうと思えたんだらうな…

「鬼を連れたバカ隊員ってのはそいつかい？」

彌豆子ちゃんが入っている箱を片手に現れたのは眼を血走らせ、顔面も身体中も傷跡だらけな上に凶悪な人相な青年だ。

キターー！鬼絶対殺すマン！

言わずともみんな知っている鬼絶対殺すマンにして超過激派、風柱の不死川さんだ。

私はこれから人喰わない証明が起こると知っているけど胡蝶のぶは彼に姉の想いを託してもいいかもと思っっている時の乱入だし、ムカついただろうね。

「不死川さん、勝手なことしないでくれませんか？」

私もちよつとムツとしたし。

本当に柱の皆さんは進行役を遮って話をするのが大好きなんですね。

頭突きされるとかざまあ。

◆◆

「お館様のお成りです」

やって参りました。お館様による竈門兄妹を何故見逃していたかの説明タイム。

「炭治郎と禰豆子のことは私が容認していた。そして、みんなにも認めてほしいと思っている」

富岡さんもそうだけとお館様も事前通告くらいしてほしいな。

心構えする時間くらいは与えてやってもいいじゃないか。なんて他人事のように考える。どうなるか知っっている私にとっては実際にそうなんだけど。

「鬼を滅殺してこそその鬼殺隊。竈門、富岡両名の処罰を願います」

禰豆子ちゃんを見逃した本人である富岡さんは賛成、忘れっぽい無一郎くんはどっちでも、蜜璃ちゃんはお館様の意に従うと表明。

だけど、それ以外の煉獄さん、宇髄さん、悲鳴嶼さん、伊黒さん、そして不死川さんはお館様に反対だと告げた。

「了解致しましたお館様」

半数が反対を示す中、私は賛成の意を示した。

「なつ!? テメエはそれでいいのかよ、胡蝶！」

鬼絶対殺す
同じ派閥であるはずの私が賛成の意を示したことに不死川さんは大

層驚いたようで信じられないと言うように聞き返してくる。

「別に。お館様がそうおっしゃるのなら部下である我々が従わない道理はないかと」

確かに鬼は許せない。私の家族を全員奪っておいて許せるはずもない。普段なら反対するだろう。

だがしかし、彌豆子ちゃんは別枠認定だ。カツコ但し、彌豆子ちゃんと珠世さんを除くカツコとじってやつだ。

それに私、鬼絶対殺すマンではなく上弦の弑死んでも殺すウーマンなので。

その後、伝家の宝刀だぞ！というように鱗滝さんの手紙が出てくるが、不死川さんたちは切腹で責任取れると思ってるのかオコだぞオラア！となっている。

まあ、今の時代は大正。戦国時代のように責任を取る＝切腹ではなくなってきたからなあ…大正に染まってきた私でもちよつと古くない？って思うし。

「人を襲わないという保証が出来ない。証明が出来ない。ただ…人を襲うという事もまた証明が出来ない」

シユレティンガーの猫。

実際に箱を開けるまで猫が死んでいるのか生きているのか判らない二つの事実が重なっている状態。つまり、実際に事が起こるまでどちらが事実なのか証明できない。

彌豆子ちゃんが人を襲うか襲わないか。この問答はそれに近い。

その中でも『人を襲わないという証明』になると話は『悪魔の証明』——つまり、魔女裁判になってしまいが…お館様もそっちの方向に話がいくのは望んでいないためいい感じに話を逸らした。

「分かりません、お館様。人間ならば生かしておいてもいいが鬼はダメです」

だけど、それで納得できない人物がここに一人。きつと納得しないだろうなと分かかっていて話を逸らしたんだろうけどね。

「お館様、証明しますよ。俺が

鬼というものの醜さを！」
何せここには一番手つ取り早く証明しようとする者がいるからな。
チョロい！チョロいよ、不死川さん！頼んでもないのに証明しようとするなんて!!これにはお館様も内心、ニヤリとしちゃうじゃないですか!!

という事で、不死川さんによる禰豆子ちゃんは人を襲うか証明実験。

結果は――

――プイツ!

「フランス！フランス！」

――勿論、証明出来ない。

怒っている禰豆子ちゃん可愛い〜とどこかの恋柱と同じ思考をしながらも彼らを蝶屋敷にご招待。

途中、頭突き第二弾をしようと引き返してきたけど無一郎くんに撃退されあえなく退場。

もう用事もないし、蝶屋敷でゆっくりして行ってね。

ピチピチと鳥の囀りが聞こえる。

鬼殺隊の本部でもある産屋敷邸は人里から離れた森の中にひっそりと佇んでいる。

鳥の囀り、自然あふれる景色、暖かい日差しも相まってゆったりとした時間を感じる。

柱合会議でなければ昼寝をしてもいいかなと思ってしまうほどだ。

「では、改めて柱合会議を始めようか」

その声であちこちに飛んでいた意識は柱合会議に集中した。

何れ死ぬ私が想いを託す話

「知っているか？人と鬼は仲良くなれるって馬鹿げたこと言っている女がいるぜ」

「はあ？人を喰う鬼と??狂ってんのか？」

「だよなあ。絶対、庇った鬼に食い殺されるよな」

鬼がどうやって増えるのか知った者は大抵、哀れむ。が、それだけだ。

「けど近しい人が鬼にされた時、「この子は違う」と言って庇い、喰われる。」

最初は耐えられても限界に達すれば親も兄弟も関係ないのだ。その時に一番近くにいる腹を満たせる存在食糧としか認識できないから。

——鬼は哀しい生き物だ

ああ、確かにそうだ。人だったのに人を喰わねば生きていけなくなったのだ。

本能が理性を上回れば、大切な人をその手で殺め、生きる糧としてしまうのだから。

可哀想だと思う。

同情はする。

「けど、鬼が私の命を、大切なものを奪おうとするのなら私は躊躇いもなく鬼を殺す。」

「『人と鬼は仲良くなれる』って言ってるくせに柱に就任できるほど鬼を殺すなんてお笑い者だよな？」

「しかも、最期は鬼に殺される」

「所詮、夢見がちな少女の戯言だからな。仲良くなれるのなら世の中、平穏だからな」

『人と鬼は仲良くなれる』

多くの隊員はその考えを聞いた時、鼻で笑った。
愚かな小娘の戯言だと。

—— パアアン

鬼を哀れみ、同情する心優しい姉がいなければ私も馬鹿げた考えだと一蹴しただろう。

大好きな両親を、姉を愛する家族を鬼に奪われたのだ。恨まない訳が無い。

—— パアアン

だけど、一緒に両親が喰われた現場にいたのに、同じ思いを抱いたはずなのに。

姉は、鬼に同情した。可哀想だと哀れんだ。

—— パアアン

姉のことを悪く言う奴を、侮辱する奴を見ると腸が煮えくり返るのではと錯覚するほどの怒りに駆られる。

パアアンツ!!

衝動に身を任せてぶん殴りたい。

パアアンツ!!!

だが、私も無理だと思っていたのも事実だから。人の事は言えない。

鬼を恨んでいる私では姉の想いを叶える事は出来ない。

胡蝶しのぶと違い、未来で姉の想いを叶える存在が現れると知っているから彼に託そうと無理に姉の想いを継がなかった。

鬼を恨む気持ちと鬼と仲良くしなければという使命感の板挟みになって愉快なことになるくらいならとすっぱり諦めたが今は別の意味で板挟みになって愉快なことになりそうだ。

◆◆

かまぼこ隊は回復訓練に入ったようで今日も蝶屋敷は賑やかだ。
時々、遠くから様子を窺っているが彼は頑張っているようだ。

あとの二人は随分と好き勝手にやっているようだけど。

よくやってくれているあの子たちを労うために用意したお菓子は

食われ、裏山は荒らされ夜になれば泥だらけになった野生児が帰ってくる。

本当にしのぶさんは人に寛容だな。私だったら屋敷から叩き出す。まあ、私だっていきなり怪我人を締め出す事はしない。

軽い忠告をして煽るように常中の道へ誘ってやろう。マジふざけんな。闇討ちしてやろうか。

いい頃合いなので座禅を組んでいる所に失礼しよう。

「一人でよく頑張っているわね。お友達は全然なのに」

いけない。いけない。好き勝手やられているところを思い出していたから皮肉たつぷりになってしまった。

彼はキョトンとしてから出来るようになったらやり方を教えてあげられるので！と元気よく返事した。

「…心が綺麗なのね」

彼だつてあの二人がどう過ごしているのかを知っているのによく教えてあげようと思える。

私だつたらきつちりと謝るまで教えないのに。心が広い。

「どうして俺たちをここへ連れてきてくれたんですか？」

「怪我が酷かったからよ。妹さんの存在は公認になったから拒む理由もないし」

「あとは…貴方に夢を託そうと思つて」

「夢？」

いきなりのことに彼は驚く。それもそうだろう。

ついこの間、妹を斬ろうとしていたのに夢を託したいと話されるとは思わないだろう。

「ええ、『人と鬼が仲良くなれる』夢。きっと貴方なら出来るから」

私には無理だったけど鬼に同情し、姉と同じく慈悲深い心を持つ貴方ならば叶えられるだろうから。

「怒っていますか？」

人と鬼、仲良くななんて一言も口にしていないのに突然そう言った私に彼は驚いたりすることはなく、すんすんと匂いを嗅ぐともしかしてと聞いてきた。

怒っていないと言うこともできた。だけど感情でさえ嗅ぎ分ける彼にそう言っても意味はないと誤魔化すのをやめた。

「そうかもしれないわね…鬼に家族を、最愛の姉を惨殺された時から、鬼に大切な人を奪われた人々を見る度に」

あの時から身体の奥底でどろどろとした感情が渦巻いてじりじりと私の身の内を焼く。

——鬼を許すなど。

——憎き鬼を滅せよと。

心の何処かに巣食う私が蔑んだ目で囁くのだ。

「私の姉も貴方のように優しい人だったわ。自分が死ぬ間際まで鬼に同情し、哀れんでいたわ。私はそんなふうには思えなかったけど」

姉の最期が脳裏に浮かぶ。

最期まで鬼に対して恨み言一つ言わなかった。

鬼に殺されたのに鬼のことを哀れんでいた。

姉はどうしようもないほど優しい人だった。自分が醜いと思ってしまうほど慈悲深い人だった。

「竈門炭治郎くん、どうかその想いを貫き通して。貴方が頑張ってくれていると思うと私は、安心して自分の道を進めるから」

この世界の中心
主人公である彼ならば成し遂げてくれると確信できるから。

読者から胡蝶しのぶに成った私はもう、あの物語の結末は知る事は出来ないけど『これは、日本一慈悲しい鬼退治』と言われているのだから、きつと——。

そんな彼に託せば多分、悔いなくいけると思うから。

何れ死ぬ私が期待しない話

鬼から身を守るための第一歩は藤の花を側に置くことだ。

鬼の弱点は日光、そして藤の花だからだ。

鬼殺隊の創設者である産屋敷は当然のことながら長く鬼殺隊と関わっている者の屋敷にはどこかに藤がある。

藤襲山然り、藤の花の家紋然り。柱となれば与えられる屋敷にも規模の差はあれど藤棚が置いてある。

産屋敷邸にある無限に続くのではと思えるほど長い藤棚の道の前で私は思う。

藤。ふじ、富士の山。竹取物語で不死の薬を焼いた山だと言われている不死の山。

藤、富士。転じて不死。ただの言葉遊びだが、藤の花はそう言う意味で古くから縁起の良い花としても知られている。あとは霊的な方では魔除けも兼ね備えていたはずだ。

不死を連想させ、縁起が良いとされる藤の花。それを嫌う、およそ不死に近い穢れたイキモノである鬼。

不死に近いのに藤を嫌う。なんと言う皮肉だろうか。

鬼が藤の花を嫌うのが鬼の祖たる鬼舞辻無惨が藤の花を嫌ったからだとすればそれはそれで笑えるが。

「胡蝶」

ふと思いついた考えに内心、笑っていると芯の通った声に呼ばれた。

振り返るとどこを見ているのか分からない目がこっちを向いている。確か、鼻に例えられていたか。

装備も気合も十分といった雰囲気だ。

「あら、新しい任務でも入ったのですか？」

「ああ、向かわせた隊士がやられたらしい。一般大衆の犠牲も出始めているらしいから放ってはおけない」

惚けた問いに煉獄さんはしつかりと答えてくれる。

柱合会議も終わったのに産屋敷邸に訪れる理由なんて少し考えた

だけでも分かるのに。

「十二鬼月、ですかね?」

恐らくなと煉獄さんは同意する。

そう、物語の流れから煉獄さんが相手をするのは下弦の壺だ。

「煉獄さんが行くのなら問題は無いでしょうね」

下弦の壺だけならば問題は無い。

下弦の壺と上弦の参との連戦。一般人と負傷者も庇いながら行うとなれば話は別だ。

「そういえばあの頭突きの少年を預かってどうするつもりだ? 継子の悴はもう増やす気は無いのだろう?」

「那田蜘蛛山の負傷者は全員、ウチで引き取っている。それだけです」

他意はないとニツコリと告げる。

本当は良い機会なので胡蝶しのぶと同じく託したが個人的な事情だし、わざわざ煉獄さんに教えることではない。

「もしかして、彼を継子にしたいのですか?」

「うむ…」

突然の継子の話に疑問に思ったので聞いてみるとその考えもあるようだ。

私が継子をもうとつていないことは柱たちの中では知られていることだ。

それ以前に彼の適正は水ではないので水の呼吸から派生した呼吸を使う私のもとで鍛えても意味はないので論外だが。

「彼とは短い時間しか関わっていませんが頑固者だけど根は真面目であるとは分かりますし、煉獄さんとは相性が良さそうなのでよろしいのでは?」

もともと無限列車編で煉獄さん自身そう言っていたし、継子にどうかと推しておこう。

煉獄さんの教えは師弟でないのに関わらず、かまぼこ隊に影響を与えているので実際に師弟になったらもっと強くなりそうだ。相性が良さすぎて累乗しそう。

「胡蝶もそう言うのなら継子にしてもいいな」

煉獄さんはうむ、いいかもしれないと頷いてハハハと笑う。

「…生きて帰ってきてくださいね」

そろそろ任務に行かなくてはと背を向けた煉獄さんに向けてそう
呟く。

「ん？何か言ったか」

聞かせるつもりはなかったが音は届いていたようだ。

「いえ、お気をつけて」

以前にも考えた通り、私は誰かを庇いながら戦うことに絶望的に向
いていない。

かと言って攻める側になっても十二鬼月の頸を刎ねることも出来
ない。

私に加勢したところで意味はない。文字通り足手纏いだ。

予定通りそれとなく蜜璃ちゃんを向かわせるか。

◆◆

彼女を見つけるのは比較的簡単だ。

食欲が人一倍以上あるのだから食料が急激に消費されているとこ
ろに行けばいい。

それに彼女の髪は桜餅色な上にゲスメガネによって格好がアレな
ので大層目立つのだ。

…今度、ゲスメガネの対処法を教えた方がいいかしら？

「今日は。甘露寺さん」

蜜璃ちゃんは茶屋で大好きな桜餅を食べて休憩していたみたいだ。

「しのぶちゃん！一緒に桜餅どう？」

幸せそうにもぐもぐと桜餅を食べていた蜜璃ちゃんは隣の席を軽
く叩いてどうだと誘ってくる。

「じゃあお言葉に甘えて」

可愛いなと思いつつも隣に座ってお茶と桜餅を頼む。

彼女が幸せそうに食べるものだからそれに惹かれた人たちが茶屋
に寄っていくので茶屋は大盛況だ。

柱といえども女の子。女の子は世間話に花を咲かせるものだ。キヤツキヤと花を咲かせながらそれとなく本題を話す。

「そういえばさつき、産屋敷邸で煉獄さんと会いましたよ」

「煉獄さんに？新しい任務でも入ったのかな…」

「ええ、そうみたいです。なんでも列車で起こる怪事件を調べるよ
うで」

「列車かあ…風景を見ながら長距離移動…いいなあ」

仕事でなければ楽しいですよねと同意する。

ふとゆつくりと自由気ままに旅をするのはこの世界にやってきてからしていないと気づく。今度、妹を連れてやってもいいかもしれない。

「そうそう、煉獄さんが向かう予定である列車では美味しいお弁当も売っているですよっ」

「美味しいお弁当…！」

美味しい弁当と言うと蜜璃ちゃんはどんな弁当だろうと想像を膨らませる。

多分、よくある駅弁だと思うけど楽しそうだから言わないでおう。

「もし、向かう方向が同じであれば一緒に食べたいものだ」と煉獄さんが言っていましたよ」

美味しいものと久しぶりの師との食事。それは大層魅力的なよう
でうーんと悩んでいるようだ。

「仕事があるとはいえ、久々の師弟の時間も取れると思いますし、行っ
てみたらどうでしょうか？」

何に悩んでいるの？え、柱としての仕事？

そんなの一緒にやっちゃえばイイヨ。いいから煉獄さんのところに
行ってみなヨ！

キツト良イ事、アルヨ!!

「うんー！しのぶちゃん私、行ってみる!!」

行く決めてくれたようで私も嬉しいです。

「詳しい場所は聞いていないですが…確か『無限列車に乗る』と言って

いましたよ」

煉獄さんのもどに行くとは決めた蜜璃ちゃんは場所を聞いてくるが曖昧に答えておいた。

だってそんな話、煉獄さんと一切してないし。

列車名さえ分かかっていれば近くの駅に向かうだろうし、そこで煉獄さんと鉢合わせしてくれるだろう。

行ってくるねー!!と元気よく出発する蜜璃ちゃんに手を振って見送る。

賽は投げられた。

彼女の頑張りによっては煉獄さんは生還するだろう。

「……だけど、期待はしない方がいいんだろうなあ……」

出来る限りの最善を尽くしてもどうにもならないことがあるのを身をもって知っているから。

◆◆

「カアアーツ死亡!!死亡!!煉獄杏寿郎、死亡!!下弦の壱討伐後、上弦の参との戦闘の末、死亡!」

数日後、鎡鴉が伝令を知らせてきた。

十二鬼月の討伐情報だけだったらしいなと思っていたら、煉獄さんの訃報もセットでついてきた。

「……そうですか」

どうやら蜜璃ちゃんは間に合わなかったようだ。

優しい蜜璃ちゃんのことだ。きつと煉獄さんと会えなかったこと、後悔するんだらうな。

蜜璃ちゃんには悪いことしたなあ……

そう思っても、彼女に何も言わないので私はとても悪い女だ。

何れ死ぬ私が真意を告げない話

宇髄天元とかまぼこ隊が上弦の陸を討伐し、蝶屋敷にやってきて二月。

ようやく彼が起きた。

鋼鐵塚さんからの呪いの手紙を見た彼はあの子たちの助言に従い、鍛冶の里に向かった。

これから起こるのは確か…。

上弦の陸が討伐されたことにオコな鬼舞辻無惨が上弦の鬼たちにさっさと命じたこととしてこいよ、オラって感じで八つ当たりして上弦の鬼が動き出すんだよね？

で、その先鋒としてキモイ壺が鍛冶の里の場所を突き止めたから鍛冶の里急襲with分裂天狗

困ったことに私は鍛冶の里急襲編の結末を知らない。

その場にいた隊士は霞柱のむいむいと恋柱の蜜璃ちゃん、不死川玄弥そして竈門兄妹。

むいむいと不死川玄弥は無敵編で合掌なので死なない。蜜璃ちゃんもそんな話は聞かなかったので死なない。竈門兄妹は主人公だから言わずがもがな。

うん。隊士の方は犠牲者はいないのか。

隊士の犠牲者がいないってことは無事、二体とも討伐されるってことだ。

この短期間で下弦の伍、下弦の壺、上弦の陸、上弦の伍、上弦の肆と十二鬼月を五体も討伐してりゃ鬼たちも黙っていない。特にパワハラ上司。烈火の如く怒っているんだろなあ。

ムカ着火ファイヤーインフェルノくらいしているのではないだろうか。

逆に鬼殺隊は士気が上がる上がる。だけど、不死川さんが言っていたように最近の隊士はクソ弱いのでこれから攻めてくる十二鬼月たちに瞬殺されないように柱稽古ってやつをやるんだよね？

うん。これからやるのがこれでもかと詰まっている。

とりあえず、私はお館様からお呼び出しを受けているので時間的に鍛治の里には間に合わないのは確定しているので彼らに頑張ってもらうしかない。

受け入れ態勢は万全にしておくから安心して死力を尽くしてほしい。

◇◆◇

十二鬼月の二体同時討伐と禰豆子ちゃんの件で緊急柱合会議が開かれた。

まさか、禰豆子ちゃんが太陽を克服するとは思わなんだ。

それはそうと鬼舞辻無惨はパワハラ上司の称号では飽き足らずストーカーの属性も得るとは罪深い。いや、最初から罪深い存在なんだからどね？

里で頑張ってくれたむいむいと蜜璃ちゃんを労いながらも内心、考えていると。

「その件も含めてお館様からお話があるだろう」

幼女富岡がいい感じにまとめた。

自分、柱じゃないですとか言ってるけどこれのどこが柱に相応しくないって思ってるの？

柱最弱であるおねーさんの目を見ていつてごらん？ほら、怒らなから。

脳内で幼女富岡をおちよくっているとあまね様がやってきた。

そう。お館様ではないのである。

残念ながらお館様は死にかけなので柱合会議に出ている場合ではないのだ。

なんでも産屋敷一族は呪い？のせいで短命だそうで…。

かと言ってお館様が死にかけているから会議しないとかが言ってる場合でもないので奥さんのあまね様が出張ったわけだ。

「上弦の肆・伍との戦いで甘露寺様、時透様の御二人に独特な紋様の痣が発現したとの報告が上がっております」

マ？痣ってあれよね？確か煉獄さんのお父さんが柱やめるきつか

けになったやつだけ？

いつの間にそんなことになっていたとはと横目でむいむいと蜜璃ちゃんの姿を確認するがどこにも痣なんてない。治療した時にも見かけなかったし当たり前だ。

とりあえず話を聞いてみよう。

「ぐあああ〜ってきました!!グッてしてぐあーって!心臓とかがぼくんぼくんして耳もキーンてしてメキメキキイツて!!!」

啞然。全員が同じように啞然とする姿はコントでも見ているかのようだ。

…蜜璃ちゃん…炭治郎タイプなんだね…薄々そんな気はしていた。
「……」

蜜璃ちゃんに恋する伊黒さんも何も言えずに頭を抑えるしかない。

うん…ご愁傷様です。

もう一人の当事者であるむいむいの証言からなんとか痣が出る条件は分かった。

ほえ〜心拍数二百越えかつ体温が三十九度以上ね〜

…うん、ムリだね!!

最弱の柱である私には出来ないとよく分かった。

それ出来るのって本当に人間??ちゃんと生きてる??いつの間にか死んでない??

「あまね殿も退室されたので失礼する」

緊急会議は一旦終了。これからは会議の内容から今後の話し合いつて時に富岡さんは堂々とサボることを宣言した。

「六人で話し合うといい。俺には関係ない」

抜け駆けは許さんぞ、富岡。

柱稽古に参加しない私だって残るんだ。やる気なくても話だけは聞いてけよ。こっちもサボるぞオラ。

最近の行動は目に余るようで不死川さん、伊黒さんが詰め寄るが幼女富岡にそれをやっても意味がないんだな。これが。

「富岡さん、言葉が足りなすぎです。ちゃんと分かるように説明してください」

「……俺はお前たちとは違う」

はくい、頂きましたく俺はお前たちとは違うく

不死川さんは自分よりも強いって勘違いしたけど、本当は反対。お前たちの方が強いっていう意味。

マジふざけんじゃねーよ。

きちんと説明しろって言ったよね??全然分かってねーじゃねーか。那田蜘蛛山の気概はどこ行ったんだよ?今こそその気概を發揮するところですよ。

後、柱最弱の地位は譲わけないだろ。馬鹿なの?お前如きが最弱なわけないから。

私が!!ワーストワン!!だ!!

オラオラ行けー不死川さんーそこだー

パアアン

内心、不死川さんを応援していると悲鳴嶼さんの喝が入った。

「座れ…話を進める…」

これにはサボろうとしていた富岡さんも思わず座る。

さっすが鬼殺隊最強だなあ。

◆◆

「最低でも柱二人、お館様の護衛につけるべきだぜ」

何とかできないのかと不死川が悲鳴嶼さんに掛け合うが無理だと一蹴される。

「柱という貴重な戦力は己一人の為に使うものではないとの一点張り…」

困ったものだど嘆く悲鳴嶼さんに場の空気は沈黙する。

「……」

己のために最高戦力を使うべきではない、か。

この場にいる全員は何も言わないし、お館様に護衛をつけるのは賛成なようだ。

「他ならぬ本人がそう言っているのです。護衛なぞつけなくてもよろ

しいのでは?。」

ただ一人、私を除いて。

「しのぶちゃん…?。」

「胡蝶、どういうことだア?。」

蜜璃ちゃんは困惑し、不死川さんは怒りを露わにする。

隣にいる伊黒さんなんて不死川さんが乗り移ったかのように睨みつけてくる。

「どうもこうもそのままの意味ですよ」

別におかしいことではないのに本当にみんな、お館様のことが好きみたいだ。

「付き合いの長い悲鳴嶼さんでさえ、護衛の説得は不可能だったのですから私たちが何を言ったって無駄です。それに産屋敷家の歴代当主は皆、誰一人として護衛をつけていなかったようではありませんか」

歴代のこと引き合いに出す。

歴代の柱たちだつて一回位は考えたはずだ。

その点に関して当時の当主と対立したことはあるはずだ。

なのに誰も護衛をつけることはできなかった。

そして、それが答えだ。

「そこに無駄な労力を使うくらいならば柱稽古で有意義に使うべきです」

「テメェ!!何言ってるのか分かってんのか!!」

私の言葉が気に食わなかったようで不死川さんは私の胸ぐらを掴む。

彼の人に心酔していれば流せる言葉ではないと分かっているのだから甘んじて受けいれる。

決して避ける方がめんどくさいことになると思つたわけではない。

「ええ。少なくとも皆さんよりも現実を見ているつもりです」

今のお館様は死にかけた。そんな状態で守つたところで別の意味ですぐに死ぬ。

彼を守りきつたとしてもすぐに死に、その時に出た犠牲は無駄死に

となる。

素直に彼を囚にし、ご子息を守った方が犠牲は少ない。

第一、本人は鬼舞辻と心中する気満々だ。しかも妻や二人の娘を巻き込むつもりである。

「柱稽古についても話は終わりましたし、やることもあるので私はこれで失礼しますね」

これ以上、護衛について話すつもりはない。

そつと不死川さんの手を解き、部屋を後にする。

胡蝶、と悲鳴嶼さんに呼び止められる。

「どうしましるか？ 悲鳴嶼さん」

さつき言外にもう話しかけんじゃねーよと言ったのにまだあるのかと内心、苛立ちながら聞く。

「お館様と何かあったのか」

襖にかけて手に力がこもる。

お館様と何かあったのか、かあ…

悲鳴嶼さんは目が見えない分、他の感覚が鋭い。

蜜璃ちゃんだって私の発言に困惑していたんだ。彼も何か感じることもあったのだろう。

「いいえ。何も」

唇が上がり綺麗な弧を描きながら私はそう言った。

◆◆

感情の制御ができないのは未熟者の証。

頭では分かっているし、そう自分に言い聞かせているが苛立ちは治らない。

ふとした瞬間にあの出来事が脳裏に蘇る。

特に意識していないのに頬の筋肉が釣り上がるのを感じる。

今の自分はさぞかしニツコリと微笑んでいるのだろう。

ああ、これではダメだ。

頭を振って深呼吸。

余計なことを考えるからダメなんだ。素振りしよう。

鍛錬場で無心に剣を振っていると近づいてきた気配が入り口で止

まる。

「どうしたの？カナヲ」

やってきたのは妹だ。大方、柱稽古の話だろう。

「師範、柱稽古の参加を指示されました」

「そう。これからの戦い、今までのようには行かないわ。生き残るためにもしっかり励みなさい」

「あの…師範の稽古は誰の後でしょうか…？」

妹は上目遣いに聞いてくる。

私は深呼吸を一つする。

「私は今回、柱稽古には参加できないわ」

「え…ど、どうして…私、もつと師範と稽古、したいです」

モジモジと恥ずかしそうにおねだりする妹の姿に全てをぶん投げて稽古をつけてあげたくなる。

だが、そういうわけにはいかないのだ。

ここは心を鬼にして断らなければならない。

「最近のカナヲは自分の心に素直になつてきたわね。いい兆しよ」

その背景には彼がいるのだろう。

よしよし順調に行っているなあとほくそ笑み、同時に複雑な気分になる。

自立していく妹の姿を見てお姉ちゃんは寂しいです…

妹の可愛いおねだりも見れたし、癒されもした。

大いに満足なので終わりにしたいところだが柱稽古中は時間が取れないだろうし、余裕があるうちに伝えておかなければならないことがある。

私が止まらないと決めた時からずっと、迷っていたことがある。

私は、彼女を私のようにしたくないと思っっている。できれば巻き込みたくないとも。

だけど、妹が鬼殺隊に入った今、巻き込まないだなんて無理な話だ。彼女は必ずあの場にやってくる。

そして、私は――

「師範？」

「いい機会だから伝えておくわ」

上弦の弐の討伐は必要なことだ。

討伐しなければ主人公の前に立ちほだかり、鬼舞辻の討伐は遠のく。

できれば私一人で終わらせたい。だが、それはできないだろう。

あれはチートだ。能力を分かっているも完璧に対応できない。

どう頑張っても足搔いても一人では勝ち筋が見えない。

「私たちの姉、胡蝶カナエを殺した鬼について」

「——っ」

「姉さんを殺したのは十二鬼月。これからの戦いでは十二鬼月は必ず出張ってくるわ。遭遇する確率は以前より上がる」

それはカナヲにも分かっていたのだろう。

各地の鬼はいなくなり、今は嵐の前のような静けさなのだ。

何かが起こるということを肌で感じているのだろう。

「その鬼は氷の血鬼術を使うわ。姉さんの死因のうちの一つは肺を内部分から潰された事。そこから考えるに敵のすぐ近くで息をするのはやめておいた方がいいわ」

「それは…どうすれば倒せるのでしょうか？」

接近した時、呼吸をするなどと言われ、妹は困ったように聞き返す。

呼吸は私たち人間が鬼を倒すのに必要な技術だ。それをやるななど死んでくれと言ってるようなものなのだから疑問に思うのは当然だ。

「簡単な事よ。あの鬼のことだから必ず私のことを狙うわ。だから私が全力で奴を弱らす。そしてカナヲ、貴女が頸を落とすのよ」

「私が…？」

だけど私は敢えてどう対処すれば倒せるか伝えなかった。

変わりに重要なことを妹に突きつけておく。

決定打を与えるのは自分だと思わなかったようで聞き返してくる。

「ええ、隙についてね。私には頸を落とせるほどの力はないから」
妹を抱きしめて撫でる。

「大丈夫。今のカナヲなら出来るわ」

私は本当に愚かな姉だ。

今、酷いことを託そうとしている。

不誠実なことをしている。

だけれども、私は、私のエゴで何も言わないことを決めたのだ。

「ありがとう、カナヲ。愛しているわ」

だから私は胡蝶しのぶのように全てを伝えることはしなかった。

何れ死ぬ私が死地に招かれた話

「緊急招集——ッ!!緊急招集——ッ!!」

鏖鴉の伝令を受け、山を駆ける。駆ける。

「産屋敷邸襲撃イ!!」

間に合ってほしいと思う。でも、それは無駄だとも思っている。

だって、

お館様は、彼女たちは——

ドンッ!!

爆ぜた。

火薬によって威力が上がった爆発音と木と肉の焦げた匂い。そして熱風が私に襲いかかる。

——自らの意思で心中するのだから。

それが最善の選択だと信じて。

鬼舞辻無惨と心中しようとする。

それは知っていたがまさかこんな大掛かりな爆破だと思わなくてしばらくの間、呆けてしまう。

どこからあんな火薬を手に入れたのだろうと場違いなことに思考を巡らせかけて今はそんなことを考えている場合ではないと頭を振り、産屋敷邸跡地を目指して駆ける。

ここから最終決戦(?)の無限城編に入る。

どこがどうなって無限城で戦うことになるかは知らないが。舞台は産屋敷邸跡地としか言いようがないんだが。もしかして生えるの?無限城。

3分で終わる悪霊の家じゃん。

他の柱たちの気配がする。

一番乗りは悲鳴嶼さんだ。きつと自主的な警護ですぐ近くにいたのだろう。

「テメエかアアア!!お館様にイイ何しやがったアアーーーー!!!」
そして次点は不死川さんだ。

襲撃者に怒鳴るがそれは濡れ衣というか…する前にされたというか…。

不死川さんの怒鳴り声になんとも言えない顔になる。

それでも速度を緩めずに駆けていたので木々の合間から鬼舞辻無惨の姿を捕捉した。

上半身裸で有刺鉄線みたいな血鬼術みたいなものを操っている。

紙面越しではよく見た顔、直に会うのは初めましてな鬼の親玉にして全ての元凶。

その姿にギリツと奥歯を噛み締める。

私が一番殺意を抱いているのは姉を殺した上弦の弐である童磨だ。

———
だけど

鬼が居なければ両親は死ぬことはなかった。

鬼が居なければ私たちはこんな殺伐とした世界に足を踏み入れることはなかった。

鬼が居なければ姉は死ぬことはなかった。

———
そう。鬼が、居なければ

こんなに苦しい思いしなくて済んだのに。

全ての元凶である彼が存在する限り、鬼は増える。

鬼によって誰かの悲劇が生まれる。憎しみと哀しみ、殺意の連鎖は止まらない。

苦しくて苦しくて、知らないフリをしたくても持て余してドロドロとして煮詰まることしかできない感情が心の奥底でとぐるを巻くしかない。

私が一番殺意を抱くのは、上弦の弐である童磨だ。

だけれどもそれと同じくらい私は、鬼舞辻無惨を恨んでいる。憎んでいる。

上弦の弐を殺したら次は鬼舞辻。

上弦の式を殺す前にチャンスがあるのなら先に鬼舞辻を仕留める。そうしなければ私は、鬼に大切な者を喰われ殺された私たちは、心穏やかに過ごせない。

「無惨だ!!鬼舞辻無惨だ!!奴は頸を斬っても死なない!!」
「っ!!」

悲鳴嶼さんの叫びに刀を構える。

今、悲鳴嶼さんは何と言った?頸斬っても死なない?

さっすがラスボス。やめてくれ潔く死ねよ。

頸を斬っても死なないのならば、毒で殺す?

毒で確殺は出来ない。だが、動きを緩めたり回復速度を遅くする事くらいは出来る。

それを狙うのなら出すのは最も攻撃数が多い蝶の舞――

刹那の思考で情報を処理して技を繰り出す姿勢に入る。

誤差はあれどその場に駆けつけた全員が技を繰り出そうとする。

即興だけど、どうにか敵にだけ攻撃するように合わせられるよね?

むしろ合わせてくれ。切実に。

一抹の不安を覚えたがもうトップスピードに乗っているからどうにもならない。

「苦しんで――死――え?」

捉えた。

そう確信した瞬間、踏んでいた土の感触がなくなり浮遊感が私を襲う。

その感覚が襲ったのは私だけではなく、攻撃に移っていた全員だ。

見れば土を舐める炎の姿はなく、代わりに障子がそこにあつた。

私たちが立っている場所は全て障子が開ききっている場所で下に向かつて屋敷の景色が続いている。

――まさか。これが無限城?

驚愕に満ちながら鬼舞辻を見る。

その顔はどこまでも私たちを嘲笑い、見下すものだった。

「これで私を追い詰めたつもりか?貴様らがこれから行くのは地獄だ!!」

落ちる。墜ちる。

地面が突然なくなつた私たちは無限城に落ちるしかなかった。鬼舞辻の捨て台詞にビキリと血管が浮かび上がる。

「地獄だろうがなんだろうが絶対殺す」

私はもう止まれないし、止まらない。

覚悟はあの時に出来ている。

「まずは、上弦の弐。お前だ」

ピシヤリと障子が閉まった。

私たちは無限城に、死地に招かれた。



体勢を変えて着地の衝撃を分散させる。

一回転し、刀を構えて辺りを見回す。

「鬼たちがいない…？」

不意打ちで変わった環境。

その環境に対応している時に急襲されれば一溜まりもない。

鬼でも人間でもそこに弱いのは同じなのだから狙わないわけがないと思つていたがどうやら違つたようだ。

感じない鬼の気配に息を一つついて刀を納めた。

「どうやら絶対、私に来てほしい場所があるようね」

後ろは壁。横も壁。道が続いているのは正面だけ。

様子を見るに一本道のようだ。

「鬼に誘われるなんて不愉快極まりないけど他に行ける場所はなさそうね」

しんと静まり返つた廊下を慎重に進む。

いつ鬼と遭遇してもいいように、上弦の弐と遭遇してもいいように。

無限城で胡蝶しのぶは上弦の弐と戦う。

それだけは知っているがそれまでのことを私は知らない。

もし、辿り着く前に死んでしまったら。

もし、遭遇できなかつたら。

言い様もない不安が私を襲う。

カタカタと小さく震える手を包む。

「ブレるな、私。貫き通すと決めただでしょ」

止まるつもりはない。

覚悟は当の昔に決めた。

そのために私は私の時間の大半を注ぎ込んだ。

生臭い血の匂いが鼻腔をくすぐった。

壁がなくなり開けた廊下の片側は蓮の池となっており、反対側は鉄の扉だ。

その扉の先から血の匂いが漂っている。

音が最小限になるように努めて扉を横に引く。

ボリ

ボリ

ボリッ

ボリ

血の匂いが漂っていたことからそうではないかと予想していた。

だけれども、映った光景に思わず目を見開く。

「部屋の中は蓮の池だった。」

そこに渡り廊下ならぬ渡り橋がかかっており、先に続いている。

真ん中から響くのは咀嚼音。その周囲に散らばって倒れているのは女の子たちだ。同じ装束で血を流している。ピクリとも動かないその姿を見るにもう手遅れなのだろう。

「ん?」

喰べるのに夢中だったその背中は私の気配に気づいたのかぐるりとこちらを向く。

食べかけの手と口の周りについている血に思わず吐き気を催すがそんなことよりも私はある一点に目が向かった。

「わあ、女の子だね! 後で鳴女ちゃんにありがとうって言わなくちゃ」
虹色の虹彩。

その中に刻まれた文字は『弐』。

「やあやあ、初めました。俺の名前は童磨」

いい夜だねえとにこにここのんびりとした口調に虫唾が走る。

上弦の弐の鬼 童磨

私の姉を殺した人物。

そして、私が最も殺したいと思っている鬼だ。